

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

11

53.10.13

附属図書館



第七十七卷 第十一号 日本幼稚園協会

これからの保育〈全6巻〉

フレーベル館
創業70年記念出版

保育の原点に帰って子どもの自主性をのばす保育はどうあるべきかを考え、「遊び」「自由」「課題」「生活」「集団」「総合」の6つについて、保育の経験のある理論家と、哲学をもっている実践家の5人が集まって討論し、実践を通して解説を加えまとめたものです。

大場牧夫・海卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗 共著〈A 5判・256ページ・軽装版・ケース入り〉

●11月下旬発刊予定●

セット価格(全6巻) **9,600円**

第1巻
〈「遊び」とは何だろう〉
これから
の保育1

第1章 遊び遊びというけれど
第2章 遊び・学習・仕事・労働
第3章 お遊びと遊びのちがい
第4章 遊びに課題は不要？
第5章 遊びと生活環境
第6章 遊びを育てる保育者
(付録)フレーベルのとらえた遊びとは

第2巻
〈「自由」とは何だろう〉
これから
の保育2

第1章 保育者のすきな自由ということば
第2章 自由という名の不自由保育
第3章 くさりにつなげた子どもたち
第4章 自由についてもう一度
第5章 子どもの発達をみつめながら
第6章 遊びの中の自由とは

第3巻
〈「課題」とは何だろう〉
これから
の保育3

第1章 課題について考えよう
第2章 大きな課題と小さな課題
第3章 子どもは課題をどう受けとめるか
第4章 遊びから課題、課題から遊びへ
第5章 大切な家庭との連係プレー
第6章 受身にさせない課題の与え方
第7章 子どもの生活の中から

第4巻
〈「生活」とは何だろう〉
これから
の保育4

第1章 子どもたちの生活をつみこめる
第2章 園も生活の場所
第3章 子どものための子どもの生活
第4章 子どもの生活をつくるために
第5章 感動のある生活を求めて
第6章 園・家庭・地域、そして生活
第7章 保育者の生活感

第5巻
〈「集団」とは何だろう〉
これから
の保育5

第1章 個と集団について考えよう
第2章 園という集団の中で
第3章 まず個からはじめよう
第4章 型にはめない集団づくり
第5章 問題児というレッテル
第6章 問題児を生む保育者

第6巻
〈「総合」とは何だろう〉
これから
の保育6

第1章 総合のとらえ方、考え方
第2章 総合活動と子どもの要求
第3章 広がり、深まり、まとまり
第4章 総合のとらえ方とカリキュラム
第5章 保育の中の総合活動
第6章 系統と発達のすじみち
第7章 保育の流れと系統性

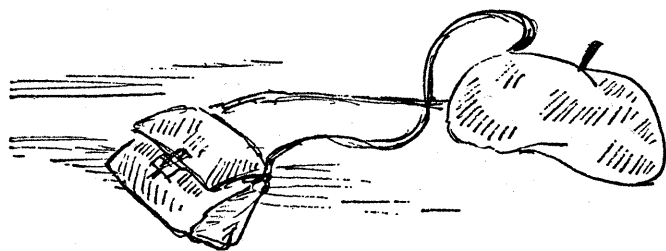
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください

フレーベル館

幼児の教育

第七十七卷 第十一号





幼児の教育 目次

——第七十七卷 十一月号——

© 1978
日本幼稚園協会

表紙 梶山俊夫
カッタ 中島英子

女子どもをそまつにする民族は滅亡する……………森田 宗一…(4)
ルソーの夢……………

——むすんでひらいて考——(その三)……………海老沢 敏…(6)

私の保育……………岩本 典子…(13)

幼児専用はさみの設計……………香川 敦子…(19)

はさみ 切り紙 紙切り紙……………原口 純子…(21)

にぎりばさみとX年のつき合い……………岡田 恵子…(25)

DeKo.

クリちゃんの動物園散歩 (二) 根本 進 (27)

幼児たちから学ぶかずかずのこと⑦ 丸山 ふみ (30)

★倉橋賞受賞論文

幼児における空間的な量を表わす言語の発達 (その一)

——言語獲得の発達—— 森 一夫・他 (32)

種子島と種子缺 潮 朱美 (39)

母の面影と缺 辻 嘉一 (42)

「はさみ」雑考 小池 三枝 (44)

◇児童文化探訪

ローセキをたずねて 皆川美恵子 (46)

大人になってゆく子ども 飯嶋日出美 (52)

★海外文献紹介 (58)

編集委員 中村 英勝・堀合 文子

本田 和子・永井 正子

編集主任 津守 真・皆川美恵子

女子どもをそまつにする 民族は滅亡する

森田宗一

平塚らいちょうさんは、『女は原始太陽であった』というスローガンを掲げて女性解放運動を展開されました。しかし私は四十年近く子どもや家庭の問題を臨床家として扱って来て、痛感させられたことは、『女性（母性）は、原始も今も未来にわたっても太陽である、太陽でなくてはならない』ということ。「女・子ども」の問題などとこれを軽くそまつに扱う民族は滅亡する。その点で、残念ながら日本は先進国どころでなく、このままだとあまり地球に長居が出来ないのではないかと思っていました。

わが国では、「女・子ども」と並べて、それは何か価値がひくい軽い事柄のように考える傾向があります。古い家族制度時代だけでなく、日本国憲法三十年たった今日でも、あまり変っていない感があるのです。心理学や人間行動の学問の面でも、法律の領域でも、子どもや女性のことには生涯をかけ

るなどとは、本道でなくわき道へそれたこと、男子一生を賭けるに価しないことでもあるかのように思われがちではないでしょうか。（私などもそういう批評を受けて来たようです）あまりに大人や、男性本位の社会の構造と風潮だと思います。

過日も八ツ岳の麓で、私が会長をしている「カトリック正義と平和協議会」の夏期合宿があり、人権とか抑圧され粗末にされている人々のことが色々論じられ、今後どう対処していくか討議されました。いわゆる南北問題、抑圧された民族、政治的弾圧をうけている人々、国内においても、未解放部落の人、心身障害者、施設出身者、在日外国人、その他思想信条による被抑圧者などの問題です。ところが、会員の一人で国際的な視野で人権や平和に熱心にかかわっている女性がこんなことを語っておられました。「私は、うちの子どもたちからよく言われるんですよ。お母さんはひろい見地から抑圧されている人々のために働いているというのが、今世界で一番抑圧され、そまつにされているのは、日本の子どもではないか。そのためにまずやらなくては駄目だと思ふ」

全く同感だと思いました。まず罪なくして闇から闇に抹殺される胎児が年々二、三百万もある。生れおちても子どもら

しく生きるに耐えない状況がいたるところにある。"おとなになりたくない。どうすればいいか。食べ物は沢山あるし、ママが沢山たべるといふ。いやでも大きくなっちゃう。どうしたらいい。ああ確実な方法がある。集団自殺すればいい" そんな会話が小学生の間でよくかわされると報告されています。子どもの自殺の増加は、心痛むばかりの今日この頃です。その他あげればきりがなくらい子どもや女性(母)の問題が、粗末に扱われています。悲しい心象風景が多いのです。

子どもには子どもの世界があり、侵すことのできない子どもの人権がある筈です。そして女性は母性です。子どもを生んだかどうかに必ずしもかわりなく、まさしく女性の問題は母性の問題です。そしてそれは子どもの不幸に直接大きくつながっているのです。「子どもは国の宝」だとか、「子どもは未来を背負う大切なものだ」「青少年問題は喫緊の要務だ」などとよくいわれます。しかしその実、子どもがほんとうに大事に考えられ、若者が真に幸せなときはないのです。「子役をつかってあがりませしめる」というのが実態ではないか。つまり田舎芝居の一座がうまくいかなくならないと、『先代萩』でも、『寺小屋の場』でも、とにかく子役を出して観客を泣

かせる。入りはいい。そのあがり是一座の親方の方がせしめるわけです。それに似たことが、子どものこと、少年問題の領域に少なくないのです。政治行政においてもそうです。それはすぐ母性(女性)の問題にかかってくるのです。つまり「女・子ども」の問題は、スローガンにはされるけれど、実はいつも何かに利用され、片隅におかれ、あるいは、あがりはごっそりほかにせしめられてしまうのです。来年は国際的な「子どもの人権」についての児童年とされています。この辺で日本も本気で女・子どもの問題を考え実行あるものとしな

いと、パチが当り、日本民族の明日を誤ることになります。先頃「養護施設協議会」編で『泣くものか』という題の本が出版されました。そこには、高度経済成長という金もうけ一筋の戦後の政治の犠牲になった家庭と子どもの生々しい事実が、子どもの作文や詩でリアルに報告されています。編集者もこんなふうに書いています。「子供たちの体験は、戦争につぐ最大でもっとも残酷なものであった。この一〇年の激変する社会は、この子供たちを証人として、後世の歴史の上で裁かれなければならないであろう」味読すべき事柄だと思

います。
(弁護士・元家裁判事)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その三）

海老沢 敏

三、小学唱歌《見わたせば》

前章において、《むすんでひらいてはルソー作曲か？》という問題について、現在まで論じられてきた主要点について紹介してみた。《むすんでひらいて研究史》については、私自身の研究発表をつけ加えておかなければなるまい。私自身のこの問題に関する関心は、およそルソー生誕二百五十年祝年の一九六二年（昭和三十七年）以前にさかのぼるものであるが、研究発表のかたちで

は、昭和四十九年（一九七四年）の音楽学会第二十五回全国大会（十月三日―四日、於同志社女子大学）で《結んでひらいて考》——ルソーとの関連において——と題して、口頭発表をおこなった。さらに音楽学会関東支部第一〇七回定例会（第十九回東京音楽学会・音楽学会合同例会）で《明治唱歌《見わたせば》とルソー——明治初期洋楽移入に関する一考察——》をおなじく口頭で発表した。この要旨は《音楽学》（第二一卷第一号・昭和四〇年三月）に掲載されている。

拙稿は小学唱歌集初編に収められた《見わたせば》につけられた

伊沢修二ならびに遠藤宏の注釈の由来についてはまずはじめにアプ
ローチを試みているが、本稿でも、まず小学唱歌《見わたせば》
から論じはじめることが妥当だろう。



図版① 《小学唱歌集 初編》の
タイトル・ページ

《見わたせば》は《文部省音楽取調掛編纂《唱歌集》初編》に

取められて発表された。このいわゆる《小学唱歌集 初編》の初
版のタイトル・ページには《明治十四年十一月刊行》と謳われて
いる(図版①)。《小学唱歌集 初編》の編集刊行については、す
でに幾多の研究結果が発表されているので、詳細はそうした文献
にゆずることとし、^(注1)ここでは直接《見わたせば》に関係するデー
タだけを簡単に示しておこう。

(注1) 以下目ぼしいものをだけを列挙するにとどめたい。

遠藤宏著《明治音楽史考》(有朋堂・昭和二十三年)

山住正巳著《唱歌教育成立過程の研究》(東京大学出版会・
昭和四十二年)

伊沢修二著・山住正巳校注《洋楽事始》(音楽取調成績申報
書)(平凡社《東洋文庫188》・昭和四十六年)

東京芸術大学音楽取調掛研究班編・浜町政雄・服部幸三監
修《音楽教育成立への軌跡——音楽取調掛資料研究——》
(音楽之友社・昭和五十一年)

この《小学唱歌集》の編集をおこなったのは、明治十二年(一
八七九年)の十月に設立され、伊沢修二が御用掛に任命された
《文部省音楽取調掛》であった。当時、東京師範学校長の要職に
あった伊沢修二(一八五一年——一九一八年)は御用掛兼職を命

じられたが、彼は明治八年（一八七五年）にアメリカ合衆国に留学し、翌九年にルーサー・ホワイティング・メイスン（一八二八年——一八九七年）なる音楽教育家を知ることによって、以前から関心をもっていた唱歌教育、音楽教育にいつそうつよい抱負を抱くにいたっていたのだ。伊沢の帰国は明治十一年（一八七八年）であったが、翌十二年（一八七九年）三月、〈音楽伝習所設置案〉が文部省で回案され、音楽の公教育についての第一歩が踏み出されたものである。伊沢はこうした音楽教育の推進をはかるために、ボストンから前記メイスンを招聘すべく努力し、この米国歌教育家は明治十三年三月はじめにはるる日本を訪れたのであった。

到着後のメイスンにとつてのさつそくの仕事は、「東京師範学校附属小学校及東京女子師範学校附属練習小学並ニ幼稚園生徒ニ来週〔四月第一週〕ヨリ唱歌教授」をおこなうことであつた（音楽教育成立への軌跡）一、二ページより引用）。

こうした実際の唱歌教育活動とならんで、メイスンが二年間の在日中に果たした大きな役割が、《小学唱歌集》および《唱歌掛図》の編集作業であつた。もちろん、この仕事は、〈音楽取調掛〉がおこなつたものであつたが、その中心が伊沢でありメイスンであつたのである。

その編集作業は明治十三年（一八八〇年）から翌年にかけておこなわれ、明治十四年（一八八一年）十一月十五日には、掛図と唱歌集の出版版權届が提出され、さらに改正の仕事などをほさみ、翌明治十五年（一八八二年）四月に両者の初編が完成するにいたつたのだ。《小学唱歌集 初編》の冒頭には、明治十四年十一月という日付をもつ〈音楽取調掛長 伊沢修二〉の〈緒言〉が掲げられている。

その全文を以下引用してみよう。

「凡ソ教育ノ要ハ徳育智育体育ノ三者ニ在リ而シテ小学ニ在リテハ最モ宜ク徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ今夫レ音楽ノ物タル性情ニ本ツキ人心ヲ正シ風化ヲ助クルノ妙用アリ故ニ古ヨリ明君賢相特ニ之ヲ振興シ之ヲ家國ニ播サント欲セシ者和漢欧米ノ史冊歴々徴スヘシ曩ニ我政府ノ始テ学制ヲ頒ツニ方リテヤ已ニ唱歌ヲ普通学科ニ掲ケテ一般必須科タルヲ示シ其教則綱領ヲ定ムルニ至テハ亦之ヲ小学各等科ニ加ヘテ其必ス学ハサル可ラサルヲ示セリ然シテ之ヲ学校ニ実施スルニ及ンテハ必ス歌曲其当ヲ得声音基正ヲ得テ能ク教育ノ真理ニ悖ラサルヲ要スレハ此レ其事タル固ヨリ容易ニ舉行スヘキニ非ス我省此ニ見ル所アリ客年特ニ音楽取調掛ヲ設ケ充ルニ本邦ノ学士音楽家等ヲ

以テシ且ツ遠ク米国有名ノ音楽教師ヲ聘シ百方討論悉シ本邦固有ノ音律ニ基ツキ彼長ヲ取り我短ヲ補ヒ以テ我学校ニ適用スヘキ者ヲ撰定セシム爾後諸員ノ協力ニ頼リ稍ヤク数曲ヲ得之ヲ東京師範学校及東京女子師範学校生徒并兩校附属小学生徒ニ施シテ其適否ヲ試ミ更ニ取捨選択シ得ル所ニ随テ之ヲ録シ遂ニ歌曲數十ノ多キニ至レリ爰ニ之ヲ割斷ニ付シ名ケテ小学唱歌集ト云是レ固ヨリ草創ニ属スルヲ以テ或ハ未タ完全ナラサル者アラント雖モ庶幾クハ亦我教育進歩ノ一助ニ資スルニ足ラント云

爾

《見わたせば》はその《小学唱歌集 初編》全三十三曲の《第十三》をなしているのである。ここでは譜例①および図版②として、《小学唱歌集 初編》の当該ページを紹介しておこう。(次頁参照)

すでに前回の研究史の中で触れたように、この《小学唱歌集

初編》には、作詞者、作曲者の名前は挙げられていない。これは《見渡せば》だけの問題ではなく、全部に亘ってそうなのである。《小学唱歌集 初編》ならびに《唱歌掛図 初編》が刊行されて、ひろく広められるに先立って、音楽取調掛は、こうした唱歌集編集の仕事と、唱歌集にもとづく実際の教育の仕方をひろく一

般に紹介するために、公開の《大演習》を催している。

「明治十五年一月三十日及び三十一日の兩日、音楽取調の成績報告の爲め、大演習を昌平館に開き、本省卿輔以下諸官及び内外貴紳の臨場を牒講し、本掛伝習生、兩師範学校及び学習院等の総生徒を会集し、諸楽演奏を奉行セリ」(《創置処務概略》、《洋楽事始》二九ページより引用)

第一日には、メイソンが「唱歌并に音楽進歩の情況を報告」(同右書三〇ページ)したあと、「東京師範学校附属小学生徒、唱歌掛圖第十二曲及び単音唱歌七種を演」(三〇ページ)じたほか、なお、ピアノ独奏や重奏、小学校上級生による唱歌(単音ならびに複音唱歌)があり、さらに《本邦俗楽》の演奏もあった。第二日には、掛長 伊沢修二から音楽取調の現況報告があり、第一日同様さまざまな演奏がおこなわれたのであった。《創置処務概略》は最後に次のように述べて報告を終えている。

「抑々、該兩日は天氣晴朗にして、寒將に去て春將に來らんとするの好景に際し、本省卿輔巴下諸官は云うに及ばず、皇族、大臣、外国公使其他朝野の紳士、学校生徒親族朋友の臨場、実に意外に出て、満館立錫の地なきに至れり。蓋し和漢洋雅俗諸楽曲を一場に演奏せるは、本会を以て嚆矢とす。本会の執行は、音楽に係

第13

第13

手た びた きた きた きた きた きた きた きた きた

へま へま へま へま へま へま へま へま へま へま

ミヤ ヤ ナ ニ キ ニ コ ハ キ ミ キ ナ ナ モ シ セ バ ニ の

ハ ズ ル キ ノ ニ シ キ シ ヲ ソ

譜例① 《小学唱歌集 初編》 第13《見わたせば》の楽譜

第十三 見わたせば

一 見わたせば。何をやまきこ花梅。
 こたまぎと。みやこへ。そ。
 みちもを。まろ。神。をぞ。
 きほひまろ。おろ。神。して。
 ふるあめり。そ。ろりける。

二 みわ〜歩ば。やま〜りな。
 をろへ〜え。ふ〜ま〜りえ。
 うま〜た。た。そ〜み〜ろ。ろ。
 あたろ。神。をぞ。あつ〜びえ。
 ろろ系けて。ほ〜れろり。
 ほ〜ける。

図版② 《小学唱歌集 初編》 第13《見わたせば》の歌詞

る思想を社会に喚発し、尋で音楽会の興行等、陸続世に行わるるに至りしは、本会与りて力ありとす。(同右書三一ページ)

第一日のプログラムを次に列記してみよう。

午後第一時 諸員着坐

音楽取調掛助教及伝習人等奏楽

洋風管絃楽 二曲〔指揮役メーソン〕

大平曲 (各種管絃合奏)

ウエイルス国歌 (同)

音楽教師メーソン氏唱歌並音楽進歩ノ情況の報告

午後第一時半

東京師範学校附属小学上下等諸級生徒進入(洋琴進行曲)

上下等諸級生徒〔合百拾五名〕

唱歌掛図第一曲ヨリ第十二曲迄ノ練習(箏・胡弓合奏)

〔箏・山勢松韻、鳥居忱、胡弓・林蝶〕

下等諸級生徒唱歌四種〔百拾五名〕

見渡せば(箏胡弓合奏)〔同上〕

春の弥生(風琴)〔メーソン〕

幼稚唱歌二曲(進メ進メ、マストラヲ武士)〔洋琴〕〔同上〕

上等諸級生徒唱歌三種〔九十一名〕

うつくしき我子(風琴)〔メーソン〕

閨の板戸(同)〔同上〕

墨田河原(洋風管絃楽合奏)

右終テ退出〔洋琴進行曲〕

午後二時半、音楽取調掛伝習人奏楽

洋琴六曲

独弾曲 四曲〔鳥居忱、林蝶、加藤定、谷沢久良〕

二人聯弾曲 一曲〔千村筆、吉田キサ〕

三人合弾曲 一曲〔遠山杵、米田蝶、幸田延〕

午後三時

女子師範学校生徒進入〔本科七十九名、予科百四名〕

(洋琴進行曲)、音楽取調掛助教及伝習人之ニ合ス

単音歌唱 三種

五月ノ風(洋琴)〔メーソン〕

鏡ナス(同)〔同〕

燕(同)〔同〕

複音唱歌 一種

隅田河原(風琴)〔同〕

三重音唱歌 一種

薰ニ知ラルル(風琴)〔同〕

高等単音唱歌 二種

栄ユク御代(洋風管絃楽器合奏)

富士山(同)

右終テ退出

午後四時 休憩(来客ニ茶菓ヲ供ス)

午時四時半 音楽取調掛員山勢松韻等奏曲本邦俗楽等

新晒(箏三味線合奏)

〔箏・山勢松韻、三味線・加藤定〕

午後五時一同退散

〔音楽教育成立への軌跡〕四六七ページ——四六八ページ

シ)

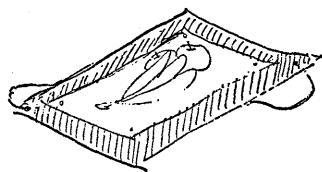
第二日のプログラムについては、これを省略するが、午後二時

にはじまった第二部の中に「学習院生徒唱歌〔百廿八名〕」が歌うものとして、次のように記されている。

「見渡せば〔箏・山勢松韻、胡弓・吉田キサ、加藤定〕〔同右書、四六九ページ〕

こうして「見わたせば」は、小学唱歌のひとつとして、私たちが日本人の前に、その姿を現わしたのであった。(つづく)

(国立音楽大学)



私の保育

—— 雑感 ——

岩 本 典 子



(I)

私は朝の公園が好きです。なぜなら、電車を降り、公園を通り抜けて幼稚園に向かうこの時間は、まさに一日の始まり、と思うからです。舗装されていない小石の転がる道を歩く時、何本もの大きな木の間を通る時、そしていつの間にか裸だった木にあおあおとした葉が繁り、花の蕾を見つけた時、私はそこに自然のもつ暖かみを感じるので。どんなことでも全てを包みこんでくれる暖かみを。

その公園の中にあつて、ある時は水のはった水たまりの表面を靴の先でそっと押してみます。ベリッと亀裂の入る感触を愉快に思いながら——。ある時は目をつぶり両手を拡げて何歩、歩けるか等と馬鹿な試みもします。一つの小石を追いかけて蹴り続けてみたり、時には、今日の子どもの達の顔を思い浮かべながら……又昨日の活動を思い出しながら……。私にとつて沈んだ気持ちもはずんだ気持ちもイライラする心も、いつも暖かく受け容れてくれる朝の公園です。

この公園を抜けて少し歩くと、武蔵野の住宅地の一角に小さな幼稚園があります。多くの子ども達を育て、そして今、

八十名の子ども達と共に私のことも見守ってくれる愛する幼稚園です。

学校を卒業して、憧れの幼稚園の先生になれたのは五年前のこと。初めて「い、わも、と先生」と呼ばれた時の気恥ずかしさと戸惑いは今でも思い出すと私の心に、ある緊張感を与えてくれます。それは、十六年間続いてきた生徒業、つまり、教えてもらう立場から突然、教える立場となった故に起こった緊張感かもしれません。

幼ない頃から、先生という人物に威圧感を覚え、いつも小さくなっていて自分を思い浮かべると、私にとっての先生の存在は、人間である前にまず、先生であった、とさえ思えてきます。

この五年間で私が心がけてきたことは、先生であるがために出てくる甘えをまず捨てようということでした。大人だから、或いは先生だからという一種のカサをかぶった状態を捨て、子ども達の前に、一個の人間として立っていかうと思いました。

そして、子ども一人一人と接していくうちに改めて生まれてきた疑問は、「幼稚園とは一体、何であるか」「子ども達にとって幼稚園はどういうあり方がふさわしいのか」というこ

とでした。けれども、この問題はすぐに解答が得られるものでもなく、今すぐ、結論を出そうとも思っていない。ここでは、毎日の子ども達との関わりを通して、そこで感じたことを改めて自分の中で問いなおし、試行錯誤していきながら考えていけたら、と思うのです。

(II)

年少男児Aは気の弱い子どもであった。新しい物事に対して常に不安を覚え、その前に立っては手も足も心の中までもが固まってしまっているのが私にも感じられた。友達との交わりにおいても、「おまえは、なくからいれてやらないよ」とこのような状態はますます仲間に入れてもらえない不満をかきたたせ、Aの不安をつのらせていった。自分でもどうにもしきれないイライラがそこに生じ、どこに居ても自分の居場所が見つからない風で落ち着かなかつた。

私までもが焦りを感じ、保育者という立場で、何とかしてあげなければ……どうすればよいのか……と気負った。この時の私とAの関係はまさに先生(大人)とAであり、

それは私自身をAの心の内面にまでほり下げて、Aと共に感じ合える先生ではなかったようである。Aも私に近づいてくることをしなかった。

夏休みに入り、Aの心にどのような変化があったかは解らないが、二学期にAが自ら見つけた居場所は「絵を描くこと」であった。茶色の絵の具を筆にたっぷり浸こませ、紙に向かってスーッと線を引く。平行してもう一本引く。そして二本の線を何本もの短かい線で結ぶ。もう一枚紙を取ってきて、再び同じものを描く。今度のは二本の平行線がゆるやかなカーブを描いている。もう一枚、もう一枚、後から後から茶色の筆一本でスーッとチョンチョン／＼の絵が生産されていく。後から後から同じような絵が産まれた。

そのAの前で私が出ることといったらAにマイナスになると思われる言葉を避けることであり、ただひたすらに見守ることだけであった。そして後は何枚も何枚も出来上がってくる二本の線の端と端を継ぎあわせてみることに、それだけであった。Aによれば、それらは全て、電車の線路であったのである。その線路は途中で切り換えしがあったり、二又に分かれたりしながらも延々と続いた。廊下に

貼りきれずにホールにつなげて貼った。二十枚は越えていたと思う。

それから何日間もAは線路を描き続けた。そしてある日、茶色の線路は青いゴミ清掃車へと変わっていった。

その時、私はAの心の開きを垣間見た思いがした。残念ながら私に向かっての心の開きではなかったけれど……。一枚の紙に対しての大きな心の開きであった。そして開かれた入口から線路が生まれ、どこまでも果てしなく止まることを知らないかのように一気に描きあげていったAを見て、長く続いたAのイライラも私の困った保育者としての焦りもこれでオワリ、という気分になった。

(III)

以上は二年前の私の体験をもとに書いたものですが、二年前の今、この時の私の感じた中にどこか納得し得ない点を見るのです。今、改めて、私が安心して終わってしまっただけと良かったのかどうか、と思えてくるのです。Aの心の開きとは、本当にこのことだったのか、一心に紙に向かって線

路を描いていたAの状態を真に心の開いた状態とみて良かったのかどうかと。

ここで考えなければならぬことは、心の開き、とか心を開く、とは一体どういうことなのだろう、ということです。そして、それは前に述べた「幼稚園とは一体何であるのか」の疑問とどこかで結びついていくような気がしてくるのです。

「心を開く」という言葉を考えた時にここにはいろいろな要素が含まれていると思います。例えば、心をゆるす、とか心の安定（自分の居場所がある、ということ。そこで打ちこむことが出来るということ）とか。これだけを考えるとAの場合同様に紙に向かって心をゆるしていたし、そこに自分の居場所を見出していたといえるのですが、それは、他者との関わりという面からいえば、あるいは「心を閉ざした」状態であったのではないかと思うのです。

私達保育者は、子どもが一つの物事に熱中して取り組んでいる姿を幼稚園の様々な場所に見ることが出来ます。絵を描く、物を作る、本を読む等はそうすることの出来やすい一つの活動だと思えますが、それらの「物」に向かって心が引き込まれ、その世界に深く浸り込んでいく、ということとは（極

端な言い方になりますが）他者との関係を断ち、それによって自分と物との世界に安定を求めていることになるのではないのでしょうか。

人は、人と関わっていく中で、一層豊かな心の開きを覚えていくものと思うのです。とすると、私が「物に向かって心を開いた」と表現したのは適切ではなく、むしろ、他者との交わりにおいては、心閉ざした状態であったと考えるところにAにとっても私にとっても次への出発があるのではないのでしょうか。つまり、他者に心閉ざす程一つの物事に熱中するということは、これから外に向かって心を開いていくための一つの準備段階である、と思います。ある活動に十分な時間をかけ、それが心ゆくまで満たされると、次の新たな活動へと移っていく子ども達を私達は多く見えています。それは決して「心を閉ざす」という閉鎖的な見方ではなく、他者や他の物に対して心を拡げていくために、自己に秘めたるものを育てていっているのだと思わずにはいられません。Aの絵が線路からゴミ清掃車へと変わっていき、後に彼が絵を描くことによって自信をつけ、友達からも認められ、そして仲間との交流がもてるようになった、ことを考え合わせても一層、その思いは深まります。

さて、もう少し考えてみると、それでは保育者である私にとって、心を聞くとはどういう姿勢を意味するのか、という問題が起こってきます。

それは、子ども一人一人の個というものをありのままに受け入れていこうとする姿勢だと思えます。子どもの持っている価値感を大人の価値感で決定していくのではなく、子どもがどのような時に生き生きしてくるのか、又、どのような時に本当に自由なのかをよく見極め受け入れていく柔軟な心と頭がそこに必要とされてくるのではないでしょうか。それは、子どもとの距離をちぢめることにもなりますし、共に活動し合える状況を作り出すことにもつながってくると思います。このことは、子ども達と接する保育者にとって最低条件なのではないか、大人の価値感に従わせようとする時子どもの心は決して開かれることはありません。この条件が満たされた時に、初めて子どもも心を開いてくる、と確信を持つのです。

子どもはこちらが子期せぬ時に、体ごと飛び込んでくることがあります。その突然の体当たり面に面喰らうこともしばしばですが、そこでの私の役割は、両手を拡げるまでの余裕はないにしても、せめてしっかりとその子どもを受けとめてあ

げることだと思うのです。もし私がスルリと体をかわずようなことをした、とすれば、彼らは勢い余って他の何か障害物にでもぶつかるか、さもなければ、ぶつかりの対象がなくなることによって行き場のない戸惑いを感じるのではないのでしょうか。例え、その体当たりが突然のものであったにせよ、子どもに対して心の開いていた保育者とそうでなかった保育者とは、子ども自身をありのままに捕えることにおいて大きな違いが生まれると思います。そしてそのことは子どもが小さな胸の或る部分をほんの少しでものぞかせてくれることがあった時に、それに気づくことのできる保育者ともなり、見すごしてしまう保育者にもなる、こととつながってくるのではないのでしょうか。

このようにしてみると、私達は生きた子ども達に対して、いつでも心を開いて接することが余儀なくされてきます。何故なら、それが子どもらと共に歩むことにもなり、子どもらと共に感じ合える者ともなるからです。それらの基盤の上に立って、信頼関係が育っていくのだ、とつくづく思います。

(IV)

さて、私が毎日の保育の中で感じ続けてきた「幼稚園とは一体何であるのか」「子どもにとって幼稚園とはどのようなあり方がふさわしいか」という問いかけも私なりに考えがまとまってきつてあります。勿論、まだまだヒョッコの私に、この無限の拡がりを見せ底をつくことを知らない幼児教育の、あるべき姿などは臍気にもつかめるはずありませんが五年目を迎えて、今、私の考えていることを記しておくのもこれからの私と子ども達との関係に何かの形で役立つかも知れない、と思いつつ。

私なりに結論を出すとなれば、「幼稚園は子ども達が生活をしている場である」とこのようになるのです。今更言うまでもない、と思うのですが、子ども達と接しているとやはり、この言葉しかないのです。

生活をしている以上、そこには他者とのぶつかり合いも生まれますし、何をしてよいのか見つけ出すことの出来ない状態もあるでしょう。けれども、幼稚園という場が、子ども達一人一人の個を真に認め、尊重していく場であったとすれば、どの子ども達もその中で彼らが持ちうる価値を存分に育て、確実に成長していくのではないのでしょうか。

それを私達大人はわかっているつもりなのに、ある時、ど

こかで、知らず知らずのうちに、子どもを大人の価値基準の中にはめこんでいこうとしているのではないのでしょうか。大人の価値の枠の中に子どもを押し込み、自由な真に子どもらしい、内なる生活のあり方を忘れあつかも子どもの外的要素のみを求めて自己満足に浸っているように思われるのです。又、子ども達も、既成されたものを受け入れ、それがあたりまえだと思ってしまうていて、何故という疑問を持たないのは恐いことだと思えます。

現代の大人社会において既成概念が安定を示すのに対して、子どもは一切それらのものに捕われず、どろどろとした生活の場の中で、自由な生き生きとした発想を産み出して安定を求めていって欲しいと願います。

そして、これらの空気で満ち満ちているのが、「幼稚園」なのではないかと思えます。

私は、そのような幼稚園の中で、子ども達と共に歩み続けながら、一方において、保育者としてのあるべき姿を考え続けることが出来れば、と願っています。思うこと、と実行すること、が一向に伴わず、子ども達を前にしてまごまごしている私なのですが。

(東京・武蔵野相愛幼稚園)

幼児専用はさみの設計

香川 敦子

私たちは幼児と道具との出会いに興味を
持った。大脳の「出先機関」といわれる手
は、もみじのように可愛らしく、その大脳
に各種の回路が超スピードで組立てられて
いるのを「出先機関」として象徴するごと
く、微妙に各指の協調作業は進歩してい
く。おしゃぶり、がらがら、スプーンは、
幼児にとっての道具であろう。

私たちはもう少し高度のものとしてはさ
みを考えた。三歳児は、幼稚園に入園する
まで、家では、はさみの使用経験のないも

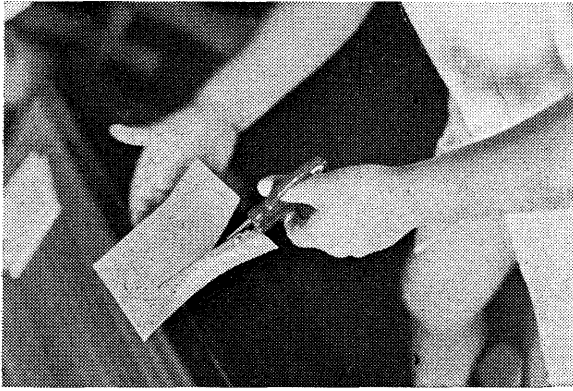
のも多い。私たちはその出会いをみた。従
来の幼稚園用といわれるはさみを初めて持
つとき、第一の難関はハンドル部分(指輪)
と指のマッチした関係である。片方に母
指、他方に人指指を入れると、大体指のつ
けねまで入ってしまう。一度、試みにその
ような状態に御自分の指をはさみに入れて
みていただきたい。いくら指を動かしてみ
てもハンドル部分は動かず、従って刃は開
きも閉じもしないし、紙は切れない。

母指が斜にさしこまれて固定できると

か、人指指、中指の二本をさしこむので固
定できるとかいう場合に、左手は紙を水平
に保ち、はさみの刃はそれに垂直に開閉す
ることができるので、はさみは連続的に切
りすすむようになる。私たちはこれを、は
さみの使い方の定形と思うが、幼児は屢々
はさみを水平に、紙を垂直にして切る。こ
れが第二の難関にもかかわるのであるが、
体に対するはさみと、紙と左手の位置関係
を安定させ、左右の手の動きを協調させる
ことのむつかしさである。私たちは、プツ

ンブツンと断続するのではなく、ある方向に連続的に切りすすむことができる、というあたりを、幼児に到達させたい技術と考えた。

この、体に対する位置と、左右の手の協



調となると、「大脳の出先機関」の手だけの問題ではなく、どうやら大脳そのものの「心」につよくかわることも、はさみと幼児を通して知った興味あることであった。

三歳児保育の原点となる母子分離が、果実に熟するごとく、花の蕾の開くごとく自然に成立している場合は問題がないのであるが、その経過に渋滞があると、不思議にこうしたはさみに対するトータルな対応がでさにくい。例えば、紙が刃にはさまってしまったり、手の位置が体にかたく接近して自由に動かなかったりする。三歳児の一年間に間隔をおいて色紙に画いた円の線を切りとるということを数回してもらって、習熟の過程を追ったので、こうした例がある場合には母子分離が完成すると共にまるやかな線で円が切りとれるようになるということをみた。

私たちは小さな手指を、指の厚みや、幅などあれこれ計測してみた。従来の幼稚園

用はさみのハンドル部分は、どう考えても幅がひろい。それで、薄い木の板に指を入れて穴（指輪）の設計図をかいて切りとり、

同形のもの二枚ではさみの刃の金属部分の基をはさんで接着剤で固定した。穴の内面に波形の凹凸をつけて、指が保持しやすいようにしたり、ラシャばさみにみられる「まねき」（母指輪に指にそのような傾斜をつける）をつけたり、いろいろと細かな試みをもりこんで幾種類も試作し、幼児につかわせて観察した。途中から岐阜県関市の川島工業というはさみのメーカーの協力を得て、一応市販できる完成品をつくった。川島工業では、その可愛い赤いハンドルのはさみに「ちょっきんな」と名前をつけている。

二歳くらいの小さな手には、なお大きすぎ、大きな手の幼児には、使い終わったときちょっと指がぬげにくかったり、難点はあ

る。道具に対する適応の修練こそ技術の基

礎であるのに、そのような特別なはさみを
与えることは過保護であるという批判もあ
る。たしかにそういう面もあるけれども、

「今までははさみが苦手だった子が、これ
を使わせてからはさみが大好きになりました
た」という母親の声、「どっちが使いやす
い？」(従来のもので)ときくと、「こっ

ち」と得意気に新製品をさす幼児の顔に接
すると、あつてもよいものだという自信を
もつ。

そして、母子分離のできにくい幼児に、
手に合ったはさみで自由に切ることができ
るといふ(紙を円滑に切るといふ快感は、
手先の快感だけではなく、大脳の支配する

心の、ある種の自由の獲得であると思われ
るので)その心が、母親からの分離、自立
して自由になるといふ心への橋わたしにな
るのである。

(姫路短期大学)

はさみ 切り紙 紙切り紙

原 口 純 子

一、はさみ

ちかごろの子ども用のはさみは以前のも
のに比べてかなり良質の物が出まわって
いることはよろこばしいことである。

指を通す穴も子ども手の大きさに合っ

ているし、刃のかみ合せもよいのでかなり
不器用な子どもでも、はさみを手に持ち、
紙をあてがえば切ることができる。刃の間
に紙がすべり込んで切ることができないと

いうようなことは少なくなっているように思う。

保育用品は、とかく子ども用ということ
で、安からう悪からうの大人ですら使いに
くいようなものが与えられることが従来見
受けられたように思う。

ここ数年、幼稚園や保育所側の教材や教
具に対する関心が高まり、不器用な子ども
だからこそ良いものを与えようとする姿勢
がうかがわれる。

子どもにとって使いやすく安全なはさみ
が与えられるようになったことはうれし
いことである。

二、切り紙

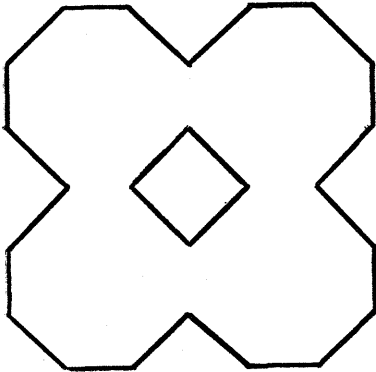
五月の中ごろ二年保育の年少児のクラス
をのぞいてみると、五、六人の子どもがテ
ーブルについている。中央に二、三色の色

紙が二十枚ぐらい置いてある。子どもたち
ははさみを持って切り紙をしたり、おしゃ
べりをして楽しんでいる。

筆者が近づくと「せんせいおはな」と、
大へん得意そうに花型の切り紙をひらひら
させる。「せんせいわたしのあげる」と別
の子も同様の花型の紙をさし出す。

「あらありがとう」などといいながらテー

▲ 図 1



ブルを見ると同様の「花」が八枚も九枚も
ある。

作っているところを見ると、正方形の色
紙を四つにたたみ、四分の一の正方形にし
て、四すみをはさみでパンパンパンと
切つて開くと図1のようなものができあが
る。たんだ紙をぱつと開いて「せんせい
おはな」と見せてくれる。同じ色の紙で切
り、また違う色の紙を切り、何枚でも何枚
でも紙があるうちはなくなくなるまで切りつづ
ける。

保育者としては際限もなく色紙を使って
四つたたみにしては四すみをパンパンと切
つて同じような「花」を作っていられる
と、色紙がとてもしっかりしない、という気
持と、何の変化も発展性もみられないこの
活動にイラダチを感じて、何とか模造紙に
はりつけてみるとか、茎や葉をつけるよう
にしむけてみようかと努力したり、あせった
りする。

しかし子どもは、どうもその方にはあまり興味を示さないで、とにかくどんどんいっばい切る。

くり返しに終って発展性がないとか、紙が無駄だとかいう気持ちをおさえて、どうしてこの活動がそんなに楽しいのかを観察してみると、この活動がこの四歳の年齢の子どもにとって大へん好まれる理由がいくつもあることに気づく。

。切りっぱなしの一息切り

パチンと切る一息切りというのははさみの使い方としては大変幼い段階のものといえよう。はさみの上手、下手は、左手の動かし方とともにはさみの呼息のさせ方にある。

してみるとこの「花」の切り方は入園間もないはさみの下手な子どもにとってかっような活動であり、その上、こんな素朴な

はさみの操作でとても素敵な「花」ができてあがることは大変うれしいことにちがいない。

ちなみに、はさみの練習などといって売っている「切りがみあそび」や「せいさくノート」などというワークノートを見ると、年少の入園間もない子どもにはどれもむずかしい。

はさみの下手な子どもにとって単純でまっすぐな線ならやさしく切れるかというところではない。決った線に従って切るということ自体がむづかしいのである。

一息切りの次にやりやすいのは、たとえ印刷された直線などよりはるかに複雑な線でも自分で描いたかたちを切る、という活動のように思える。

。重ね切り

四つだたみの色紙の四すみをバンバンと

はさみで切っただけで、開いてみると自分のした作業の四倍の効果があがり、思ってもみなかった型ができあがる。ちよつとはさみの角度を変えたとまたちがった「型」ができる。

こんどはあげたらどんな型になるかしら、というマジックのような期待や、ここをこう切るとこうなるといううたしかな期待がある。

結果としては花のような型ができるので、外から見ると、はてしなく同じような型の花づくりをしているように見えるが、彼らは花をたくさん作っているわけではなく、一回ごとに期待しながら、切ることをたのしんでいるのである。

あげたらどんなかしら、と思いながら、どんどん切っている子どもに、先生が、切り終ったいわばカスのようなものをとりあげて、はっぱをつけましようとか茎がどうのといったところで、興味を示さないのも

無理からぬことである。

三、紙切り紙

色紙を四つたたみした大きさというの
子どもの手に程よい大きさである。また切
る時にひらひらした一枚紙とはちがうちょ
っとした重い切り味がある。

ただ切るのには、色紙はぜいたくでもつ
たいないと思われるかも知れないが、実は
そうではない。かりに広告紙や新聞紙なら
どんなに切ってもイライラせずすむから
というのでそれらを使うことにするとどう
であろうか、仕上りの美しさはまったく違
うのである。切って開いて赤い花やピンク
の花ができあがることは子どもの活動を一
層たのしいものになっているといえる。

考えてみれば、子どもは一つの活動を習
得する過程で、何度も何度も同じことをく

り返すことを思い起さなければならぬ。

砂やブロックで遊ぶとき、何十個同じお
だんごを作ったならばよく、だんごの作
り方に変化や発展が見られなくても先生は
心豊かに活動を受け入れ見守る余裕がある
のに、材料がお金のかかる色紙となると、
とたんに心の余裕を失って、くり返し活
動にイラダチをおぼえる、という傾向はな
いだろうか。

従来さまざまな面から検討されて来た、
保育の形態が実は、教材の管理ということ
と強いかわりを持っていたことがわか
る。

かつて、たとえば砂場や積木やブランコ
のように減りもいたみもしない教材、教具
はいわゆる「自由遊び」の時間におこな
い、折紙や絵を描く活動や楽器などのお金
のかかる材料やいたみのくる教具について
は「一斉活動」として教師がコントロール
して、教材管理をしてきたといえよう。

子どもに活動を自由に選択させ、試行錯
誤やくりかえしの活動を認めるなら、それ
なりの材料の準備と教師側の心がまえがな
ければならない。

たくさんの「花」を切った子どもたちを
数日後に見ると、同じように紙を切る場合
でもはさみを動かさずに、左手に持ってい
る紙をたくみにまわして、うずまぎや、複
雑な型を切つてあそんでいた。

(茨城県・桜村立竹園東幼稚園)



にぎりばさみとX年のつき合い

岡田恵子

机のひき出しに一丁のにぎりばさみが入っている。さし渡し十二種。何時頃から私の手許にあるのか記憶に残っていない。三度身辺整理をして勤務園を移動したが、特に大切に扱ったわけでもないのに、手許から離れないで残っている。

ある幼稚園では、

「先生とのはさみ、イメージがあわない」

次の幼稚園では、

「舌切り雀のおばあさんだね」

はさみを使っている私をみて、若い職員

から言われたことばである。にぎりばさみは、それ程珍らしくなったかと思う。

今までに何丁のはさみを用意したことか。その度に、目立つ印をつけたり、名前を彫ったり、そのつど、

「このはさみ 私のため使ったら戻してください」

と全職員に宣言もするのだが、すぐなくなる。はさみにはそんな性質もあるのかと考えているが、このにぎりばさみとは不思議に長いつき合いになってしまった。大分

前、捨てようかと思ったが、今は愛着が出てしまった。

おもいで ―その一―

このはさみも大いに活躍した時がある。

四角・三角・長四角と重ね折りの色紙で模様切りをした。子どものはさみでは細かい細工が出来ない。折り目ぎりぎりの線まで切りとるのは、刃先がよく切れるにぎりばさみがよい。子どもの目の前で切りとり、

やおら広げてみせた時の驚き・感嘆、まるで手品をみせている感じだ。出来た作品をガラス戸や壁に貼る。特に冬は、戸外の雪をバックにしてガラス戸や窓に花が咲いたようになる。このような事を通して他の組の子とも仲よしになった記憶がある。

最近、家庭も含めて模様切りに類したものがみられなくなった。どこかに、何らかの形で生かせるような気がする。

おもいで — その二 —

四歳児を受けもっていた時、ようやくはさみの使い方に馴れた子どもが、切る面白さに勢いついて床やさんごっこをはじめたらしい。降園時刻が近づき保育室に戻ってみると、五・六名の子ども達が何やら賑やかに騒いでいた。よくみると髪が不揃いになっている。誰がはじめたのか、お互いに切り合ったのか、お母さんに叱られるのも

気づかない様子。そのまま帰宅させるには余りチグハグなので、原因を確かめる時間もないまま手当をする。その時にもぎりばさみを使ったように思う。

陽の当る窓ぎわに椅子をならべ、得意そうに腰かけていた子ども達の表情を想い、そろそろ社会人になる頃だろうと考えるとほほえましくなってくる。

最近、幼稚園に来る年齢になると、はさみの使い方に抵抗がないようだ。

- ・切り紙をするとうき出ず
- ・切るのでなく、もぎとってしまう
- ・はさみを横にするので、折り目丈く

こんな状態を見せる子どもが組に何名かいたものだが、はさみを使えない子の話題は職員室で耳にしなくなった。

家庭での遊びも、切ったり、描いたり、ブロックやプラモデル等、多様化している

が、手先を使うことが多いように感ずる。その反面全身を使う遊びに欠けている面が気になる。

この間も机のひき出しをあけたまま仕事をしていると、女の子が二、三人入ってきた。

「園長先生 これなあに」

「はさみでしょう 小さい家にある」

にぎりばさみを見つけて珍らしそうにみたり、さわったりしていた。

今度色紙を用意しておき、子ども達が遊びに来た時、模様切りでもしてみせようか。今の子どもはどんな様子をみせるだろう。このにぎりばさみは、まだまだ、私と子どもの間をつないでくれそうだ。

(函館市立函館幼稚園)

クリちゃん動物園散歩(二)

根本進

前回、スイスのチューリヒの動物園でひぐまの赤ちゃんをみていて、それまで機嫌の悪かった一族が仲よしになった話をしましたが、動物の親子の様子は本当に可愛らしく、ユーモラスで、どこの動物園へ行っても一番の人氣です。

私が上野動物園へ散歩に行きはじめのころ、猿山で赤ん坊を抱いたニホンザルを見つけると、あつという間に時間が終ってしまつて、その日は他の動物は見られなくなったものです。

猿の母親は赤ん坊をととても大事にあつかうと同時に、しつけが実に厳しいのに驚きました。母親が食事中などに赤ん坊が自分勝手に離れたり、危い方向へ遊びに行こうとすると、片手でその足を強くひっぱって引き寄せたりします。が、そのひっぱり方一つで、こどもには母親の機嫌がよく

伝わるようです。しつくと、言つても、実は母親本位の機嫌次第で、もしも自分の食べようとするものに、こどもが手など出そうものなら、それこそすごい剣幕で怒ります。この辺はやっぱり動物だなと思う事もありますが、この御機嫌はいつも敵然としています。教育に自信がなくなると、すぐどこかの先生に聞いて、そのたびに方針が変る人間の母親より、こどもにとって親の氣持が解りやすいかも知れません。

そのころ上野のカバの飼育担当の係員は西山登志雄さんで、赤ん坊が生れるころになると会つてもソワソワ落着かなくて、一緒に喫茶店に行くとウェイトレスが運んでくれるコップの水にいきなり指をつつこんで水温を気にしたりしていました。

カバのお産は大抵プールの中です。そのためにプールに

はいいつも新しい水を張っているのです。ある冬の夜でした。仕事で起きていたところへ電話でカバのお産を知らせてくれました。車で駆けつけたのは二時だったと思います。

シーンとした温室のようなプールに、誕生したての赤い小さなかたまりが母親の鼻さきに浮いて耳を動かしていません。

「なんだ、もう無事にお産が終ったんですね」と私はプールのサイドにいた西山さんの耳もとでこっそり言うと、彼はそれよりもっと小さな声で答えて、

「実はこれからの方がもっと大変なんです」

母子とも水中にいて、ときどき息をする以外全く静かです。次に何が起きるのだろうかと見ていると、まず赤ちゃんが潜ってお母さんのお腹の方向へ泳ぎはじめました。「あ、そうかオッパイを探すらしいぞ」私もじきに気がついたのですが、なにしろお母さんの体は大きいから大変です。

体にそって螺旋状にまわりを廻ります。それに呼吸を合わせるようにお母さんもゆっくり体を反対方向に回転させて行きます。赤ちゃんの呼吸はそう長くは続かず、途中で探すのをあきらめてポッカリ上ってきて、プーッと息をつ

き、またしばらくお母さんの顔のそばにいます。それからまた少し経つとまた潜って……これを繰り返す中に、「しめた、見つけたぞ！」

突然西山さんが嬉しそうに大きな声をあげました。

赤ちゃんがとうとう母親の股間のオッパイに吸いついたらしく、口の横から白い乳が水中に流れているのが見えました。私はいまやっと、糞で汚れるプールの水を毎日新しく入れ替えていた理由がわかったのです。乳首を見つづられず育たなかった赤ん坊もいるそうです。

「人間は親子の対話がどうの、こうの言ったりしているけど、カバの親子なんかなんにもしゃべらないからね……」

汗をふきふきそう言ったあの時の西山さんの言葉が印象的でした。

動物人形といえば、熊、兎、犬、猫……なんでも可愛らしいこどもに作ってありますが、ホンモノで全く人形みたいなのはパンダの赤ちゃんでしょう。赤ちゃんといっても、生後五か月でしたが、北京動物園で抱かせてもらったことがあります。それは日本から、昭和四十八年、お相撲さん一行が中国へ行った時の事です。

中国からパンダが贈られたお返しに上野動物園から、中



川飼育課長と田辺獣医がニホンカモシカを運び、私もそれについて見物をさせてもらいました。私は五匹の成獣ペンダを見たあとで、もう一つの空の放飼場の中へ導かれ、そこへ飼育担当の女性、白さんと葉さんが、昼寝から目覚めたばかりの赤ん坊を運んできて、私たち一人一人に抱かせてくれました。

その時驚いたのは、全く可愛い顔に似合わず重く、力が強く、特にすごい爪でした。田辺獣医のズボンのどこかにひっかかったと思った一瞬、ビーツと布地が大きく引き裂けてしまった程です。あれなら自然の中で、木のほりはさぞお手のものでしょう。

北京動物園にはこの外に、他所では見られぬシンバナザル、ターキン、オグロゾル、黒狼、紅狼など、いろいろな珍獣がいましたが、国民服姿のお客さんはそんな世界の珍獣を知ってか知らずかとても長閑な散策気分で見物していました。園内が上野より広々としている点も含めて、つまりとても大陸的な感じがしました。

特に東洋的で私の気に入ったのは金魚の展示で、露天に木製の大きなたらいが沢山並んでいて、見物客はその水面に顔を近付けて水中の金魚に見入っています。日本なら縁日の露天商に集まる人のように、或は個人の住宅ならベランダの水槽を見せてもらう隣人たちのように、私には肝心の金魚の方は貴重な品種かどうか解りませんでした。眺める人たちの様子は誠に庶民的で楽しそうな雰囲気でした。

(漫画家)

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ⑦

——水色のノートから——

丸山ふみ

保育室の床の上から

秋のある日、園外保育に出かけた四歳児の組の床に散乱している小さな紙屑を事務員といっしょに掃いていた時、幼児の髪の毛がまじっていることに気付いたことがあります。

その時、「先生、いつも夏前からこの頃には子ども等ってやるのですね」と笑って箒で集めているのは脱髪でなく、明らかに切ったと思われる髪の毛でありました。

幼い声が聞えてきたので門のところへ出迎えに出て、「お帰りなさい」「何を見つけてきたの」と幼児達に声をかけながらも、ついつい、幼児の頭に私の眼はいつてしまいました。近付いてきた担任は、私の視線に気付いて、

「先生、すみません。一寸の間に戻ってしまいました」

と恐縮して通りすぎていく後姿をみながら、近頃は五歳児の部屋の前を通りすぎる時、時には足音をしのぼせる程静まりかえってしまっているのに反して、四歳児の楽しい保育室のなかで、何があったのかと今更のように幼児の活動へ目を向けるきっかけにもなったのです。

幼児が、自分の髪の毛を切るという行為が今まで製作活動の道具をだけしか見ていなかった「はさみ」について幼児がどのように興味をもって、生活の道具として使いこなしていくかということを残しておきたいとまとめることにしました。

四歳児で入園したM君が、だんだん「はさみ」を使うことになれていく過程で残っていく作品を担任からいただいたり、時には保育室へ拾いにいたりして集め一年間、スクラップ・ブックに貼っただけのものでしたが、そのことで学んだのは、「はさみ」を使うことで製作活動として新しい経験を広げることよりも、失敗しなさいという緊張感に立たされている幼児の真剣な表情に何と今まで無神経であったかという反省でした。

幼児の生活での「はさみ」

幼児達が作ることに同じ位、こわしてしまふことが好きで、その興味が時には保育の流れをさまたげてしまふこともあります。空き箱を踏みつけたり、積み木で作った家をこわしたり、時には数人のグループで懸命で作っていたのに、何かのキッカケで、今度は水でザァザァ流してしまつていたり、削り出している時と同じように生き生きしている幼児達の姿に出合います。

「はさみ」が、削り出すことに使われる前に幼児達は大人の眼からみれば、こわしてしまふことに使っている場面が多くあります。

ところが、こわしたり、破つたり、切つたりすることが幼児達が削り出していくための一つの大切な経験になると多くの実践記録で学んでいても、ギザギザの頭をして帰っていく幼児を幼稚園から送り出すには少々勇気がいりました。

その日は、連絡ノートへ担任はいきとどかなかったと自分を責めて母親へお詫びの言葉を記したのですが、私は幼児の側に立って考えた時、幼児の試したことの意味を探ろうとし

て、努力して四歳児の仲間に入りました。その期間に、「はさみ」について百科事典の頁をめくって細かい文字を追っている間に思わず笑い出してしまいました。

西洋の王様の墓を掘り出した時、棺の中に入っていた古い「はさみ」から「はさみ」の歴史が説明されていたのですが、その使用目的の推察が、王様の髪を刈るためのものであっただろうという数行でした。

四歳児が、園の生活のリズムにすっかり安定して、行動範囲が拡がってさまざまなことを試そうとしている時期に、幼児たちが自分の生活に幼児なりに必然性をもつことを保障してあげるといふことのむつかしさを改めて感じた「はさみ」の存在でした。

M君が「はさみ」で切るという活動を経験の順序として貼りならべたことと、M君の興味や満足といった感情とは決して重なり次第に発達しているとはいいきれず、ましてギザギザと自分の髪を毛を切っているK子の心の中で考えと保育の場で長い間生活していても、わからないことが多くて恥ずかしく思っています。

(松阪市立松江幼稚園)

幼児における空間的な量を表わす

言語の発達(その一)

——言語獲得の発達——

森 一 夫
北 川 治
出 野 務

はじめに

「大きい」「長い」など、空間的な量を表わす語を、幼児が日常よく使用しているのを耳にする。このとき、幼児はこれらの語を、大人が使用すると同じような意味で使用しているのだろうか。また、仮に幼児が彼ら特有の意味で使用しているならば、正しく使用できるようになるまで、どのように発達していくのだろうか。

このような問題意識に基づいて、筆者らは、標題に関する調査を行なった。まず本稿(その一)では、幼児がさまざまな空間的な量を表わす語をどの程度獲得しているかを調査したので、その結果を報告する。次号以下、「その二」では空間的な量を表わす語がどのような過程で発達するか、「その三」では空間的な量を表わす語の獲得と物体のかさの判断とにどのような関連がみられるかを論じることにする。なお、本稿「その一」から「その三」を通じて、〈語〉は単語を示し、〈言語〉は〈語〉の集合、および〈語〉一般を示す用語として使用していることを、断っておきた

い。

本研究の意義

はじめに、本研究で取りあげた空間的な量を表わす言語には、どのような特質があるのかを明らかにしておこう。空間的な量を表わす語は、ある対象と比較してまず「大きい」と表現された対象が、さらに大きい別の対象と比較したとき、今度は「小さい」と表現されるように、事物間の相対的関係を示す言語である。したがって、相対的関係を示す言語は、たとえば「大きい」に対して、まず「大きくない」、それがさらに「小さい」というように、その語と反対の意味をもつ語との結びつきが意識されて、初めて有効に使用されるようになる。

このような空間的な量を表わす言語の特質を考えれば、これらの語の獲得を論じる場合、幼児が相対的関係を示す語として使用できるかどうかを問題にしなければならない。

これまで、空間的な量を表わす言語を含めて、幼児の言語獲得の発達に関する多くの研究が行なわれてきた。なかでも、大久保^(注1)、岩淵・村石^(注2)に代表される縦断的な調査がよく知られている。これらの研究では、一人ないし数人の幼児に対して、その成長過程を

観察し、さまざまな空間的な量を表わす言語が初めて発語された時期（初出時期）を調査している。しかし、幼児が「長い」「広い」というような語を獲得していく順序は明らかにされているが、それらの語を相対的関係を示す語として使用していたかどうかは研究されていない。また、村石は、空間的な量を表わす言語の発達を調べる際に、反対語間に「系」が成立しているかを問題にした。すなわち、彼は幼児に「大きいの反対は？」「小さいの反対は？」と尋ねて、各質問に正しく「小さい」「大きい」と答えられた幼児には「大きい」「小さい」の系が成立したと判断している。しかし、彼の研究も「大きい」「小さい」の両語を、相対的関係を示す語として使用できるかどうかを明らかにしたものはない。

そこで、本稿では、幼児が空間的な量を表わす語を獲得しているかどうかを、たんに発語できるとか、反対語を言えるということによってみるのではなく、それらの語の特質に基づいた相対的関係を示す語として使用できるかどうかを基準として、その発達を検討しようとした。

実験の目的

(1) 「大きい」、「小さい」、「太い」、「細い」、「広い」、「狭い」、「長い」、「短い」、「遠い」、「近い」、「高い」、「低い」、「厚い」、「薄い」、「深い」、「浅い」という八組の空間的な量を表わす語を、相対的關係を示す語として使用できる幼児の割合を年齢別に調査する。なお、幼児の言語獲得を調査するにあたり、これらの語を理解語として獲得しているのか、表現語として獲得しているのかを明らかにしようとした。ただし、理解語とは、他の人が言った語を聞いて、それを対象の事物と結びつけることができる語である。表現語とは、事物を見て、口に出して発語できる語である。

(2) 先に述べたように、これら相対的關係を示す語は、たとえば「大きい」に対して「大きくない」、さらには「大きい」に対して「小さい」のように、その語とその語の反対の意味をもつ語を対極として「大きくさ」という共通軸で結びつけられたときに、初めて有効に使用される。いいかえれば、幼児が空間的な量を表わす語を、相対的關係を示す語として使用できるということは、互いに反対の意味をもつ両語間に結びつきが成立していることになり、そのため空間的な量を表わす語、たとえば「大きい」という

語が相対的關係を示す語として使用できる幼児は、使用できない幼児よりも、その反対語である「小さい」という語を使用できる傾向が大きいことを明らかにする。

実験の方法

(1) 被験者

大阪と奈良の私立幼稚園、および公立保育所、計六園の園児、四歳児九二名(平均四歳一か月)、五歳児一〇一名(平均五歳一か月)、六歳児七七名(平均六歳一か月) 合計二七〇名を被験者とした。

(2) 実験に用いた呈示物

表1に示した八組の呈示物を準備した。一組の呈示物は三種類からなり、呈示物の大きさを規定する量(たとえば、球の場合は直径、細い棒の場合は長さ)は、小さいものから順に八%(ただし、直方体の箱の厚さ、およびボール紙製の箱の深さは三〇%)ずつ増加させてある。なお、どの呈示物の色彩も白色である。

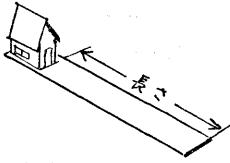
(3) 実験の手順

実験は、幼児と実験者が机をはさんで座り、一対一面接で質問する方法がとられた。表1に示した呈示物を見せながら、まず、

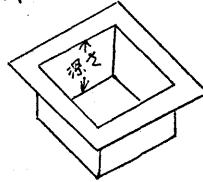
表1 実験に用いた呈示物

		(単位:cm.)			
語	呈示物		A(大)	B(中)	C(小)
1.大きい・小さい	球	直径	5.04	4.67	4.32
2.太い・細い	円柱	底面の直径	2.27	2.10	1.94
3.広い・狭い	円盤	直径	10.07	9.33	8.64
4.長い・短い	細い棒	長さ	12.59	11.66	10.80
5.遠い・近い	ホルル紙製の道*	長さ	12.59	11.66	10.80
6.高い・低い	細い棒	長さ	12.59	11.66	10.80
7.厚い・薄い	直方体の箱	厚さ	2.20	1.69	1.30
8.深い・浅い	ホルル製の箱**	深さ	8.79	6.76	5.20

注 *



**



八組の語を理解語で相対的關係を示す語として使用できるかどうかを調べた(テスト1)。その後、同じ八組の語を表現語で相対的關係を示す語として使用できるかどうかを調べた(テスト2)。「大きい」「小さい」という語の場合を例に両テストの具体的な内容を説明しよう。

〈テスト1〉 図1のような三個の球A、B、Cを幼児が見えるように机の片隅において、小さい方から二つ、BとCを取って幼児の前に並べた。そして、「大きいのはどれですか、指さして下さい」と尋ねた。次に、Bはそのままにして、CをAに取り換え、AとBを幼児の前に並べて「大きいのはどれですか、指さして下さい」と尋ねた。

〈テスト2〉 BとCを並べて幼児に示し、まず「小さいのはどれですか、指さして下さい」と尋ねた。正しくCをさし示した幼児には、Bを指さして「これは何と言うのですか」と尋ねた。

次にCをAに取り換えて、AとBを幼児の前に並べた。そして「大きいのはどれですか、指さして下さい」と尋ねて、正しくAをさし示した幼児には、

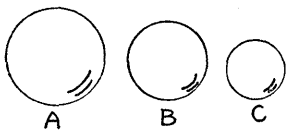


図1 「大きい」「小さい」の場合の呈示物

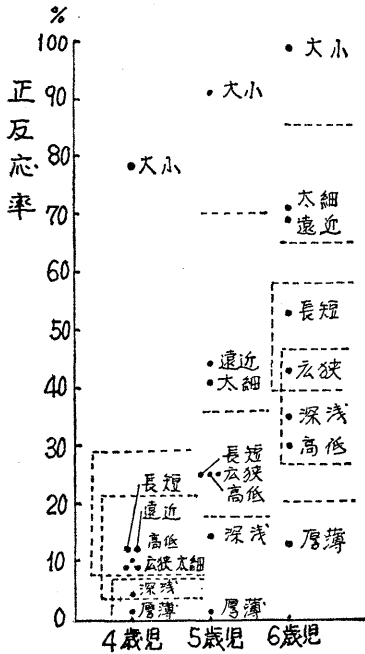


図3 表現語による正反応率

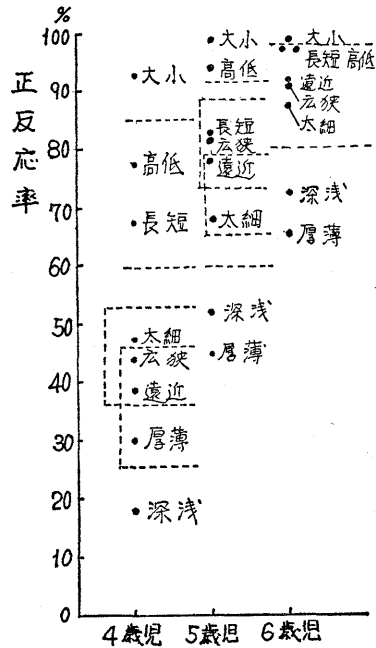


図2 理解語による正反応率

実験の結果と考察

Bを指さして「これは何と申すのか」と尋ねた。
 なお、各呈示物は2cmの間隔をあけて並べた。

図2、図3はそれぞれ、テスト1、2の正反応率、すなわち相対関係を示す語を理解語で正反応した幼児の割合、および表現語で正反応した幼児の割合を示したものである。図中の点線は、各語の正反応率間に統計的な有意差が認められなかった語群を囲んだものである。この結果は、年齢的な発達とともに、空間的な量を表わす語群が、どのように分化し、発展していくかを示唆したものと考えられよう。

まず、図2、図3で特徴的なことは、理解語、表現語ともに、「大きい」「小さい」という基本語が八組の語の中で最も正反応率が高いことである。大久保らの結果でも同様に、この語は他の語に先がけて獲得されることが指摘されている。

次に空間的な量を表わす語の獲得が、理解語の場合と、表現語の場合とどう違うか、図2と図3とをく

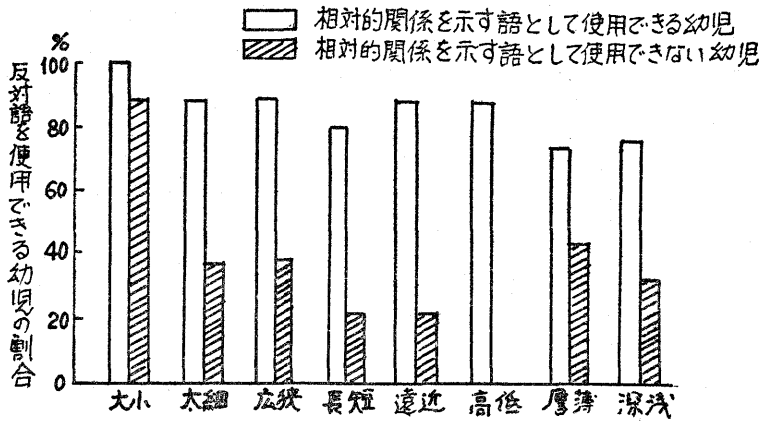


図4 反対語を使用できる幼児の割合

表2 相対的關係を示す語として使用できる幼児と、使用できない幼児の反対語を使用できる割合の有意差検定

語	大小	太細	広狭	長短	遠近	高低	厚薄	深浅
検定	3.28	5.82	5.50	3.66	6.52	2.47	3.29	4.52

いずれも $P < .05$

らべてみよう。理解語の場合では、年少児ほど各語の正反応率に大きな開きがあるが、六歳になれば深浅、厚薄以外の正反応率はほとんど九〇%前後に集中している。一方、表現語の場合は、理解語の場合と著しい対照を示している。すなわち、四歳児が表現語を使った場合には、大小以外の正反応率はどれも一〇%前後に集中しているが、年齢的な発達にともない、これらの語の正反応率に開きが大きくなっていく。これは語によって獲得度に違いのあることを示している。

では、理解語と表現語ではどちらが獲得されやすいのだろうか。各語ごとに図2と図3の正反応率に差があるかどうかを統計的に検定したところ、六歳児の大小を除いて、どの語も有意差が認められた(検定の結果は省略)。つまり、表現語よりも、理解語によって相対的關係を示す言語として使用できる幼児の方が多いといえる。このことから、空間的な量の相対的關係を理解できて、それを語で表現できるようにするのは、かなり遅れることがわかる。

次に、空間的な量を表わす語を、相対的關係を示す語として使用できれば、その反対語を理解している傾向が大きいかどうかを検討しよう。「大きい」という語が理解語で相対的關係を示す語として使用できる幼児（テストの正反応者）と、使用できない幼児に対して、その反対語である「小さい」を理解語で使用できるかどうかを調査した。具体的には、テスト1の正、誤反応者別に、テスト2の「小さいのはどれですか」という質問の正反応率を調べた。同じ手順で、他の語についてもその反対語が使用できる幼児の割合を調べた。結果は図4に示したとおりである。相対的關係を示す語として使用できる幼児は、使用できない幼児に比べて、その反対語を使用できる割合がどの語についても高い（表2参照）。しかし図4に示されるように、相対的關係を示す語として使用できるにもかかわらず、その反対語が使用できない幼児がいる。これは、年少者では相対的關係を示す語として使用できなくても、たとえば「大きい」に対して「小さい」という反対語を結びつけるまでには至らず、その前段階として「大きくない」という語に結びつけているからと推測される。

本稿では、空間的な量を表わす言語がその特質に基づいた相対的關係を示す語として使用されているかどうかを基準として、これらの語の獲得を検討してきた。

得られた結果は、次のとおりである。

一、空間的な量を表わす八組の語を、理解語、および表現語で、相対的關係を示す語として使用できる幼児の割合を明らかにした（図2、図3参照）。獲得の割合の最も高い語は「大きい」、「小さい」の基本語である。また、理解語は、表現語の獲得に比べて早い。

二、相対的關係を示す語として空間的な量を表わす語が使用できる幼児は、使用できない幼児よりもその反対語を理解している割合が高い。

（つづく）

（森Ⅱ大阪教育大学、北川Ⅱ寝屋川高校、出野Ⅱ武庫川女子大学）

注(1) 大久保愛『幼児の言語発達』東京堂出版 一九六七

(2) 岩淵・村石編『幼児の用語』日本放送出版協会 一九七六

(3) 村石昭三『幼児における性状語の系について』（日本教育

結論

心理学会発表論文集 一九六九

種子島と種子鋏

潮うしお

朱美

鹿児島から南に航路四時間。種子島は、四方を太平洋と東シナ海に囲まれ、ブーゲンビリヤやハイビスカスが咲き誇る南国の温暖な島である。

『種子島』と言えば、だれもがまず思い出すのが『鉄砲伝来』だろう。そして現在科学技術庁の宇宙センターのある島として記憶している人も多いだろう。

だが、この島に伝統工芸の手打ちの『種子鋏』があることを知っている人は意外に

少ない。またこの鋏が鉄砲伝来と時を同じくしており、四〇〇年以上の伝統を持っているのを知る人は、なおさら少ない。

種子鋏がいつ、どのように伝えられたかを正確に示す資料はないが、一五四三年（天文十二年）にポルトガル人によって鉄砲が伝えられた時、同じ難波船に乗っていた明みんの鍛冶職人かじが、島の刀鍛冶に唐鋏たうけを伝えたのが始まりといわれている。

全国でu字型の和鋏を使っていたころ島

民は洋鋏形態の種子鋏を知っていたのである。

種子鋏は明治末期から第一次世界大戦の始まる昭和初期にかけて、国内で全盛をきわめることになった。一時期は全国の市場の半分近くを占めたこともあったが、堺や県内の商人に『種子』（注）『種』などの商標の特許をとられたことや、機械化による大量生産工場ができたことなどによって、種子島の家内工場は相次いで閉鎖されていった。現

在では、わずかに五軒しか残っていない。

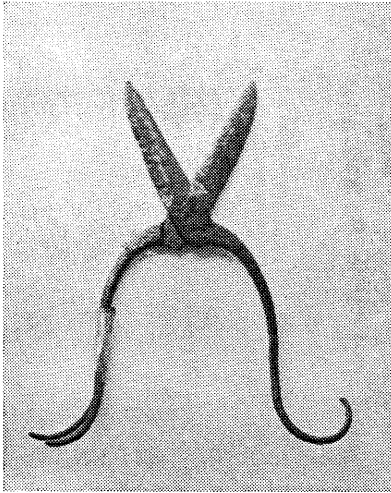
種子鋏は伝来された唐鋏の製法に刃の部分にひねりを加えて改良されたものである。製作は、根気よく三十数回の工程を経て一本一本でいねいに仕上げられる。その特色は、軟鉄に鋼を熔接するツケハガネ作りであり、これは日本古来の刀製作法の技

術をとり入れたものである。種子鋏は元

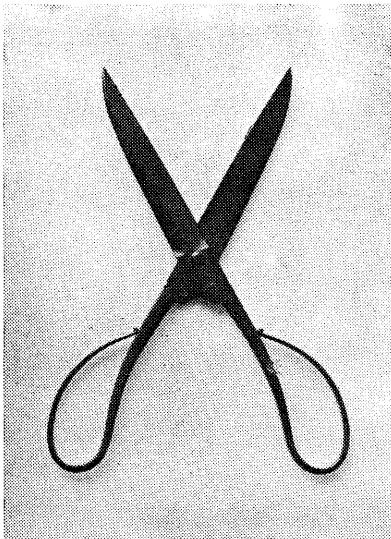
来、刀鍛冶によって製作されており、洋鋏の形態と日本刀の伝統技術を折衷させたものである。唐鋏を改良したのは、両方の刃が内面に曲がるようにひねりを加えたことであり、それは切るほどに互いにすり合うほどに研がれるしくみになっている。

種子鋏の大きさは三寸から九寸まで一寸

きざみにある。糸切り、紙切り、裁断用と用途はさまざまであるが、握りの部分が左右対称のため特に左利きの人に重宝がられる。ある左利きの女の子は、幼稚園の時に種子鋏を使い始めてから三年おきに一寸ずつ大きいのを買ってもらい、今年でもう五



初めの頃の種子鋏



現在の種子鋏

本めになるといふ話もある。

ところで、この島ではなぜ鉄砲や鉄などの高度な技術が修得され、その伝統を支えることができたのだろうか。島の歴史を調べてみると意外に興味深い。余談になるが、タバコや甘藷（かんしょ）の栽培が日本で最初に伝わったのもここなのである。

この島は維新前まで、直接に薩摩藩の支配を受けず、島主である種子島家によって治められていた。島津の圧政を受けなかったため島民は比較的自由で、いろいろなものに進取性に富んでいた。また島の四方の海岸からは、良質の砂鉄が豊富に採れ現在でも製鉄所跡がいくつに残っている。地形・風土的にも製鉄に有利なうえ製鉄技術は高かったのである。

このような素地のある種子島に難波船が漂着し、鉄砲や鉄が伝来されて技術修得がなされたのである。鉄砲伝来には、いくつ

もの逸話が残されているが、特に鉄砲製法の技術を教わるため代償としてポルトガル人に嫁いだ若狭姫の伝説は、種子島人の情熱と先見の明を感じさせる。

こうして文明の先端を走った島の鉄砲作りも、明治十九年に鉄砲鍛冶が大阪の砲兵工廠（しょうば）に徴用されるとともに、その歴史を閉じた。そして残った種子鉄も現在五軒の鍛冶屋のうち後継者がいるのは、わずか一軒である。一人の職人が一日にわずか十本から十五本しか作れず、しかもその価格は安い。技術習得に何年もかかって、利益の少ない鉄作りをしようという人はいない。

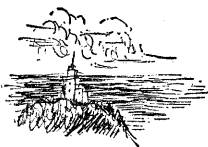
だが、種子鉄の良さはその切れ味と、母親から娘へ、娘から孫へと何代でも研いで使える素朴な耐久性にある。それは二十三年三十年使ってからわかる味である。この種子鉄が再び市場を制覇することはもうないだろうが、この手打ちの伝統がいつまでも消えず、みんなに使い続けられることが、

私たちが島民の願いである。

注1 種子島産の鉄の商標は「本種」であり、他の商標は種子島の名前がはいっていても、種子島産ではない。

* これは『種子鉄』『種子島鉄砲伝来その歴史と謎』などを参考に、また鍛冶職人を訪ねて書いた。

（国立療養所南九州病院児童指導員）



母の面影と鋏

辻 嘉 一

一週間に二、三度は新聞の切り抜きをしたり、月刊誌の連載を切り取ってスクラップしますので、鋏は座右に備えて大切にしております。

「鋏」という題が面白いので、書いてみようと筆をもちましたが、料理と鋏との縁まはは昔ほどでなく、使うことが少なくなっています。

五十年前も前のことですが、街の午さがりに「包丁やカミソリに鋏とき……」と声高に流してきたもので、結構仕事になったらしく、日蔭に荷をおろして砥石をだし腰を

おろして砥いでおりました。

幼ない時の思い出に、針差しのついた針箱のそばに母が座って、可愛い音色の鈴をつけた鋏が、時折鳴っております。横顔の美しい人だったと想いされます。満十三歳の二月に母は流行性感冒かんぼうで亡くなりました。

面影は水仙に似て七回忌

母恋しい日々を送って成長いたし、母に別れたゆえに仕事に熱中して、料理一筋でやってこられたとも言える人生でありました。

母はいつも丸鬘まるまつを結っております、近所に心安い髪結さんがあり、順番をとりに行ったこともあつて、そんな時、結綿むすわたとか丸鬘まるまつとか島田などという髪形を知り、元結もとむすの端を口にくわえて髪を束ねて、鋏で切る仕事の手際よさに見とれていました。

髪結さんから美容院の先生となり、散髪屋さんから理容師と名がかわり、備えつけの刃ものや鋏も洋風になり、昔のような日本カミソリの肌触りの軟かい心地のよさはなくなり、鋏刈りの音もさわやかになりました。

した。

母の自慢料理に「まめこぶ」という、大豆と昆布の色紙切りとを土鍋でコトコトと気長に煮たおいしいおかずがありました。缺で昆布を小角に切りながら「あんたの好きなお豆さん、炊いたげるえ……」と言いつつながら、あかずに缺を動かしている母でした。

もう一つのご自慢は、若狭の塩サバと胡瓜に細切り昆布との「あちゃら」と呼ぶ酔物の物でなかなかおいしいおかずでありました。

若狭の小浜では昔、舟が帰って来るのを待って、村人全部が魚をひらき塩をして、小判形の若狭籠に一段ずつに大笹を挟んで詰め入れ、天秤棒でかついで山越して夜露に濡れながら夜明け方に京都へつくのでした。サバ、小ダイ、カレイなども一緒に届くのでしたが、今の若狭ものと違って塩まわりが良くて身が締まり、下魚のサバと呼

んではすまないような、おいしいサバでありました。

小さな角切りにして、もみうりと三ツの長さの細切りにした昆布とを、三杯酢で混ぜ合せ、十分ほどそのままにしておいてから食べるのですが、缺でなるべく細く切った昆布から出るネットリした味が全体に行き渡り「おいしいな……おいしいな」と言いながら食べましたが、母はそれを見ながら「そうか……そうか……」と首をふって喜んでました。

大きな料理屋の娘で、おんば日傘と俗に言う育ちだったので、おかず作りはあまり沢山は知らなかったようでしたが、この二つは、お得意中のお得意であつたらしく、今も舌の片隅においしさが残っておりま

す。
師走も押しせまって大晦日になると母は、お正月のお煮染めづくりが忙しいので、お手伝いをしましたが、大福茶に小梅

と一緒に入れる結び昆布を缺で細く切つて、しっかりと結ぶのがならわしでありました。

京都は宗教の都といわれるだけに精進料理が発達しておつて、従つて昆布を沢山つかいましたので、室町時代に作られた狂言に「昆布売」とか「昆布山伏」とかの題で、若狭の小浜に荷揚げされる昆布のことが狂言になっており、昆布料理もいろいろあります。

塩昆布もその一つで、黒い色目の分厚い昆布の両面に酢を塗り、二ツ角に缺で切り、濃口醤油と清酒を八と二の割り合いにヒタヒタに入れ、落し蓋をしてコトコトと弱火にかけ、気長に煮込んでゆくと、鍋底が焦げつくようになりますので、今度は鍋底が別鍋の湯につかるようにザルなどを入れて湯煎にして、カラカラに乾くまで蓋をしないで煮続けます。

(辻留主人)

「はさみ」雑考

小池三枝

髪 作里木 木密 文 蟹 虫 碁の手

銀盤 詩の平仄 鞆 絹のふし 鍛冶屋

地獄の責 外科 爪 箸 肴 釘抜 撰

縫物 絲板 またぐら 足 手 耳 打薄

右にあげたものは、延宝四年(一六七六)

刊の俳諧付合語集『類船集』の中の「鉄」に関する語である。これを見ると、当時の

人々が鉄という語から連想するものは、はさむもの・はさまれるものから外科や裁縫の鉄・蟹のはさみまで極めて範囲が広く、現代の私達が連想する語よりも多様であっ

たように思われる。

鉄は物を切る道具である、と私達は考え

る。従って私達が鉄から連想するもの多

くは、切ることに関わる語であるうが、

『類船集』の記載は、切ることだけでなく、

物を間にはさむことを通してさまざまな連

想が働くことを示している。

舌切雀は鉄で舌を切られる。てるてる坊

主はお天気にしなないと首をチョンと切られ

る。これらにはぎり鉄で切るのだろう。童

謡の中で蟹の床屋はチョキンと鉄を使って

兎の耳を切ってしまう。ところが狂言の

『蟹山伏』では、蟹の精が現われ、自分の念力を誇る山伏の耳をはさんで苦しめる。切りはしない。

切るための刃物を「はさみ」と呼ぶ。辞

書によれば、物をはさむようにして切るか

ら「はさみ」なのだとの説明がある。確か

に、刀の類は一枚の刃で押し切るのに対し

て、はさみは二枚の刃の間に物をはさみな

がら切る。しかし、考えてみると、はさむ

ことと切ることは本来別な管である。それ

なのになぜ「はさみ」と呼ぶのだろうか。

現在用いられている「鉄」という字は、

「はさみ」という名にふさわしく、^{つぐ}「夾」である。しかし漢和辞典によれば、中国ではいわゆる「はさみ」を意味するよりも、かなばし・刀剣のつか・刀剣などの意味で使われた字である。かなばしはいうまでもなく挟む道具であり、また刀剣のつかは刃の元を挟んで作られた部分であるから、「鋏」は本来は挟むものを示す字であらう。中国で日本の「はさみ」に当る語は、「鋏刀」「翦(剪)刀」などである。「鋏刀」は二枚の刃が交叉する形に作られたはさみを意味するものであるし、「翦刀」はぎり揃える刃物という意味であらう。

日本でも平安時代の辞書『倭名類聚鈔』では、鋏の字を用いず、「はさみ」と呼ぶ二種の「鋏刀」が出てくる。一つは容飾具としての「鋏刀」、他は鍛冶具として鋼鉄を切る道具の「鋏刀」である。前者は『源氏物語』の夕霧や手習の巻で、出家する場面に取り出される「はさみ」であり、化粧

道具の一つとして櫛箱に入れてあるものだった。後者は多分交叉形の鋏であらうが、容飾具の「はさみ」はどういう形であったらうか。江戸時代の化粧具としてのそれはにぎり鋏である。もし、平安時代のものも同じであるとすれば、「鋏刀」の字はu字形の「はさみ」には合わない。にぎり鋏を表わす漢字が見当らなかつたのであらうか。因みに『和名類聚鈔』には、裁縫具として、中国でのもう一つのはさみの名称「翦刀」をあげている。しかし、これははさみではなく「ものたちかたな」と呼んでおり、江戸時代まで使われた裁断用の小刀のことであった。

『類船集』にははさみを「鋏」と書いているが、江戸中期享保二年板『書言字考節用集』によれば、「夾剪」「鋏刀」「鋏」の三字を記し、「鋏」は「俗用此字、誤」としている。この編者は、中国での「鋏」の字が別の意味をもっていることを知っていたのであらう。又、正徳二年の『和漢三才図会』には、百工具の中に「鋏」「鋏刀」をあげ、容飾具の中に「翦刀」として「翦子、鋏刀」の字をあげているが、和名抄で鋏刀をはさみと訓じている事は未詳と記している。「翦刀」は、外科用の膏薬紙を切る「夾剪」(現在の花鋏形)と「摺剪」(にぎり鋏)の二種を图示している。この外、元禄版『女重宝記』には「鋏子」とも出てくる。はさみにはこのように種々の漢字が当てられ、明治以降次第に「鋏」の字に統一されていった。

日本の鋏がにぎり鋏に代表されると考えるならば、それは本来毛抜きなどと同じく鋏むものとして出発したのではないだろうか。それは刀類や交叉型の鋏よりも刃の鈍いものだったかもしれない。切るものではないが「はさみ」と呼んで柔らかいニュアンスをもたせたもの——それが「はさみ」である。(お茶の水女子大学)

ローセキをたずねて

皆川美恵子

私の子どもの頃は、まだクルマの往来が少なく、舗装された道路で、石蹴り、けんば、陣取り、瓢箪鬼といった遊びをしました。いつもポケットに入っているローセキを取り出し、それら遊びの線を白くキチッとひき、ジャンケンをすると、遊びの開始でした。

道にしゃがみこんで、身体中ほこりっほくなりながら、絵だか字だかも、ローセキでさかんに描きました。(しかし、大切なまっ白いローセキは使わずに……)

今では、交通量が激しくなり、歩道と車道は、白線やガードレールによって分けられてしまい、道に佇んだり、道で遊んだりすることは、できなくなっていました。そのせいででしょうか、ローセキを知らない子どもがいるようです。

おもちゃ屋さんに見ると、ローセキは昔ほど出回らない

ものの、今でも少しずつは売れているということでした。しかし、やがて、「チョークなら知ってるけど、ローセキって何、全然知らないわ」という子どもが増えていくことでしょう。

そこで、児童文化探訪第二回目は、子どもたちが道路で遊べた時代のおもちゃ——ローセキをとりあげ、このローセキがどのように作られているのかを探ってみました。

一軒だけ残っていた清水工場

埼玉県の熊谷と秩父の三峰口を秩父鉄道が走っていますが、その途中に長瀬（なげ）という川下りで有名な岩場の景勝地があります。その長瀬より二駅ほど熊谷に寄ったところに、樋口（ひぐち）という駅があります。そこが、おもちゃのローセキを作っているところでした。樋口の駅を下り立つと、すぐに岩田山という山が見えます。ロー

セキは、この山から切り出される自然石なのです。岩田山の麓の人達は、農業がひまになると副業として、昔から、ローセキを掘っていたといえます。しかし、現在ではやめてしまった人が多く、唯一軒、野口さんのところが残っているだけでした。

野口さんのところは、お父さん（明治^{めいしほ}さん）の代から、ローセキを切り出しています。「おやじが生きていれば、八十二歳になるから、昔のこともわかったのだが……」と、四十五歳になる久寿さんは言っていました。今は、この久寿さんと弟の正巳さんが跡を継いで、兄弟でローセキの清水工場をやっているのです。

「いつ頃からローセキを採るようになったのですか」と尋ねると、昔のことなら、あの人がわかるだろうということで、野村友保さん（五十三歳）の家へ連れていってくれました。

野村友保さんの家で

野村さんも以前はローセキを切り出していたのです。野村さんと野口さんは、いつ頃からやっていたのかな、そうさな……と話し合い、百年位たつのかも知れないなあということになりました。

何しろ、明治二十九年生まれの、野口さんのお父さん（明治^{めいしほ}さん）が子どもの頃は、もう周りの大人がローセキを掘っていたと

いいます。百年の歴史はないにしても、九十年の歴史はどうやらありそうです。

岩田山は、岩の多いゴツゴツした、馬も入れない岩山だったそうです。みんなは、鉱脈が外に露出した露頭をツルハンで切り起こし、鋸で細かく切って箱につめ、かついで下^{くだ}りてきたそうです。ローセキは柔かいので、鋸で簡単に切れるのです。三分（約九^{cm}）角、長さ二寸（約六^{cm}）の小さな角柱の形にし、千本を一箱にして、二箱位をしょって下りたそうです。重さは、十五貫位ということでした。

野口さんはお父さんから、昔、山から四十貫をしょって下りた人がいるということを知ることがあります。村人が驚いて見つめた、なみはずれた力持の話は伝説となり、父から子へと語り継がれたようです。

本当は滑石（タルク）

さて、野村さんは、ローセキ／＼と言っているけれど、ローセキというのは俗称で、この石は、本当は、滑石^{かつせき}（タルク）という石なのだと教えてくれました。滑石は名のように、なめらかな性質をもった石だそうです。障子や襖の敷居に、ローセキ（滑石）をこすると、襖や障子は、すべりがよくなるといえます。そうい

えば、小さい頃、すべり台にローセキをこすりつけました。その上を下駄で滑り下りようものなら、こわい位にスピードが出たものです。

滑石の粉は、タルカン・パウダーといい、「汗知らず」として使われるそうです。そればかりでなく、白粉、クリーム、咳どめの薬や胃散の増量剤、DDTなどの農薬にも使われているそうです。さらさらと滑らかで、湿気を防ぐ滑石の粉は、本来は医療効果も何もない、無害無臭の粉末です。

この他、銕物、ゴム、樹脂、製紙の工業部門でも大量に使われています。たとえば、ゴムのようなネバネバしたものの製造過程には、その粘りをとめるものとして、タルカン・パウダーはなくてはならないものようです。

チューインガムのまわりに、よく白い粉がついていますが、あれはローセキ（滑石）の粉だそうです。また熱が出た時、頭にのせる水囊やゴム風船についている白い粉も、みなこの粉だそうです。おもちゃ以外に、ローセキは、子どもたちにとってこんなにも身近だったのです。

ローセキ（滑石）はもう一つの名前を持っていました。このあたりの人々は、「オンジャク」（温石）とも呼ぶということなのです。零下十度Cにもなる二月の寒い時、この石を囲炉裏の灰の中

に入れ、暖めてから布に包んで、野村さんや野口さんは、懐炉がわりに学校に持っていったといいます。「教室では、つま先に置いてなあ」と子どもの頃を懐しんで話してくれました。

暖めるとなかなかさめにくいところから、「オンジャク」と呼ばれたこの石は、土地の人々の生活の中から生み出された利用法なのでしょう。今では、茅葺の家がなくなり、従って囲炉裏がなくなり、暖めた石をじっと抱くということもなくなってしまったそうです。

戦後の最盛期

山小屋を作り、岩田山で、おもちゃのローセキを作っていました。都内に電気がひけ、電動モーターが出現するようになると、原石を都内の小石川に持ってゆき、そこで切ったそうです。しかし、やがて秩父にも電気が入るようになると、富田さん、石川さんという人が電動モーターを村に持って来て、工場を建て、村で切るようになったということです。

石川さんが作った工場というのが清水工場で、野口さんのお父さんがそれを譲り受けたわけです。野口さんは、「村に電動モーターの入ったのは、昭和八年八月三〇日だ」と言います。私達がよく覚えてますねと驚くと、清水工場の鍵には、その年月日が

記されているので確かだということでした。

やがて戦争になり、そして戦争が終つてみると、兵隊から帰つても仕事のない人が多く、ローセキを扱出す人が増えたといひます。戦後は、子どものおもちゃといつてもまだあまりなく、安いローセキが手頃だったのでしょう、小売値が一円のローセキは、よく売れたといひます。

最盛期は、昭和二十四年から三十年頃までだったそうです。約二十軒のローセキを扱う業者は、毎日忙しくローセキを切り、問屋におさめたといひます。

中国産の滑石（満タル）

やがてだんだん掘り尽され、山から出る滑石の量が少なくなつてきます。そうなるとやめる人が多くなり、みな商売がえをしていきます。昭和四十年頃のことです。しかし中国から原石が入ってくるようになり、清水工場では、以後、その中国産の石を使つて、ローセキを作るようになっていったといひます。

やめた人は、その中国産の原石を石粉にする仕事へと移つていったといひます。工業が盛んになると、タルクの石粉の需要が増えていったのです。

現在でもいくら岩田山から滑石が採れるそうです。清水工場

の滑石は、九〇パーセントが中国から来たもので、残り十パーセントが岩田山のものだといひます。そして岩田山のものは、おもひやげ用の細工物にし、子どものおもちゃのローセキには、中国産のものを使うと言つていました。

中国産というのは、満州でとれる滑石（満州タルク—略して満タル）だそうです。満州の鉱脈は規模が大きく、不純物の少ない良質のもので、秩父の石より白く、やや硬めだそうです。秩父の石は柔かく、細工はしやすいそうですが、蛇紋石が入つたりして斑になっています。

野口さんは、おしろい用にもなるという白い良質な満州の滑石を、子どものローセキとして切つています。やはり店に出すと、子どもたちはよく知つていて、より白いものから売れるといひことでした。

野原茂さんの家で

さて滑石とはどのようにしてできた石なのでしょうか、それを尋ねると、地質のことに詳しいのは野原さんだといひことで、早速電話をして、今度は野原さんの家へ連れていつてくれました。

通された部屋の本棚には、鉱物や地学の本が並び、野原さんは、本を一冊手にしながら詳しく説明してくれました。この野原

さんも親の代から滑石を掘っていたようですが、今では石粉の仕事にかわっています。

まず長瀬あたりは、地層としては二つの変成岩地帯がいっしょになっているところだそうです。群馬県の下仁田しもとから鬼石おにを通る三波川系、それに長瀬から小川町を走る長瀬系、この二つの地層が長瀬でつながっているらしいのです。

変成岩地帯というのは、地殻変動が活発な地帯で、そこでは岩石が収縮されたり、のばされたりして餅をついた状態になり、一樣化されて岩石から鉱物にかわっています。そうしてできた鉱物の一つが滑石であるようです。

野原さんは本から詳しい数字を教えてください。純粹滑石は、珪酸が六三・五％、酸化マグネシウムが三一・七％、結晶水が四・八％。しかし純粹のものはまずなく、たいてい一〇〜一五％は不純物を含んでいる。その不純物としては、アルミナ、ニッケル、酸化カルシウム、鉄分などだそうです。

変成岩が鉱物に発達したものの一つが滑石というわけですが、その変成岩は、川に流れこんで固まった水成岩が、造山活動などの大きな地殻の変動を受けて作られたものです。ですから何十万年という長い年月の中で、滑石がつくられたことになりました。一片のローセキには、そういう大きな時間がつまっています。

子どもから警察へ

話を聞いたあと、また清水工場に戻り、工場でローセキを切るところを見せてもらいました。電気鋸で切るローセキの形は、昔と違い、四角柱ではなく、平たい形のものでした。野口さんは、十円(たて56ミリ・よこ19)、二十円(たて84ミリ・よこ19)、三十円(たて82ミリ・よこ19)、あつち5ミリ、という三つの大きさの、おもちゃのローセキを作っていました。

野口さんの話によると、近年では子どもたちより、警察関係者がローセキを使うようになったということです。道路の交通量が激しくなり、裏道にも自動車が入ってくるので、子どもたちはおちおち遊んではいられませんが、交通事故や違反駐車は増加の一途です。その交通取締に、白墨よりは消えにくい、またポケットに入れても汚れることのないローセキが盛んに用いられているのだそうです。

その他鉄鋼所、造船所などで、鉄鋼に印をつけるのに、熱でも消えないところからローセキを使うそうです。

この取材を終えて、ローセキの出回り状況を知るため、東京と大阪の大きなおもちゃ問屋さんに連絡を取ってみました。東京の間屋さんは、野口さんのところの製品と、中国からの製品を扱

い、昔ほどでないにしても徐々に売れているということでした。大阪の間屋さんでは、ローセキは価格が安い上に重く、商品としては扱にくいので、今はやっていないという返事が返ってききました。

ローセキの名の起源

さて本当は滑石という石が、なぜローセキと呼ばれているのでしょうか？ ローセキの名の起源はどこにあるのでしょうか？

百科事典を繰ると、蠟石ろうせきという鉱物があることがわかります。蠟のような光沢をもち、見た目も滑石に似ているこの石は、主成分が珪酸アルミナで、滑石よりやや硬いそうです。レンガやタイルなどの原料になるほか、石筆にも用いられるということです。

石筆とは、学制が発布された明治五年以後から、鉛筆が普及する大正十年位までの間、小学校の低学年で用いられた文房具です。黒い粘盤岩で作られた石盤の上に、白いすき透るような蠟石で作られた、丸みを帯びた鉛筆の形のような石筆で、字や数を書き、子どもたちは学習しました。

この石筆は、蠟石の産地として有名な、岡山県の三石地方で作られていたといえます。そこで明治十五年頃から石筆を作っている、岡山石筆株式会社に、蠟石について問い合わせてみました。

それによると、石筆を作った残りのきれっぱしを用いて、おもちゃ用のローセキを作ったことがあるといえます。そしてそのローセキには、赤や緑などの色粉いろこなをまわりにつけたとも話してくれました。

秩父に取材に行った時、野村さんは、次のようなことを言っていました。そもそも岩田山に滑石が出るということを知って、製品化するようになったのは、大阪商人によってではないか、だからこそ戦前の一時期まで、東京ではなく大阪に製品をおろしていたのではないかと、言うのです。大阪の間屋さんに尋ねてもこの辺の事情はもうわからなくなっています。石筆の歴史や産地からして、おもちゃのローセキが関西方面から出たとは大いに考えられそうです。

明治生れの方や、今でもある地方の人達は、おもちゃのローセキのことを、「石筆」とも呼ぶようです。白くて、描くことのできる石は、まず石筆が一番身近にあって、そのかけらがおもちゃになっても、「石筆」と呼んだのでしょう。しかしやがて、それが材質からローセキと呼ばれることになったのでしょう。それが、蠟石ではなく、滑石という石で作られるようになって、「かっ石」とは呼ばずローセキ、ローセキと呼びならわし続けたものと思われまます。

大人になってゆく子ども

長女を見つめて

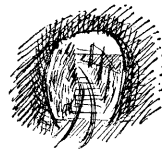
○僻地の保母になりたい

高校進学を前に、中学校では、将来の目標を立て、目標に向っての高校選択をするようにと指導がある。長女は「僻地の保母になりたい」と言って私を驚かせた。

中学二年生の頃、それまで『赤毛のアン』の「アン」シリーズが愛読書で、モンゴメリの著書だけは全巻揃えて大切に並べてあった彼女の本棚に、何か場違いな感じで、『橋のない川』が一冊立てかけてあるのが目についた。

それが、いつの間にか全六巻と並び、モンゴメリは、部

飯嶋日出美



屋の隅の本箱にと移されてしまっていた。島崎藤村も追加されていった。

不自由ということが、ひとりで映画を観に行くことを禁止されていることであり、流行の衣服をすぐには買ってもらえないことであり、テレビをいつまでも見ていたい時に勉強しなければならぬことであつたりと、その程度でしか認識していなかった娘にとって、『橋のない川』が与えた衝撃は、大きく激しいものようであつた。

「僻地の保母さんになりたい」と言い出したのは、それから間もない頃であつた。恵まれない子どものために働きたいと言うのである。

この頃から、小学校六年以来続いていた、反抗的ないらいらした態度は幾分和らぎ、大人の立場への理解を示す余裕もでてきたように思われる。だからといって、青年前期ののもや

もやした不安は、一気に解消されるようなものではない。私に教育ママだと当り散らしたりもする。有名校に進学するようと勉強を強制しているわけではない。普通の高校に進学するための普通の努力ならできるでしょと言っているだけのこと、それだからこそたまらない重圧になるのかも知れない。人並の努力ができないのではないかという不安は大きい。「私には何の取柄もない。魅力もない。能力もない。みんなが馬鹿にする。勉強をしなくてはと思うのに能率があがらない。他の人に解ける問題が私には解けない」等々自己批判と自己嫌悪のありつたけを並べ、とっさには返事もできずに、当人以上に深刻に悩んでしまった母親をしり目に、さっさと眠ってしまった夜もある。

「恍惚と不安我にあり」と、分っているも心配なのが母親で、それだからといって、唯話を聞く以外にどんな助力ができるだろうか。「あの本の中に……」とか、「私も学生の頃……」と、その年頃の揺れ動く不安が、彼女だけのものではない

ことを話して聞かせる位が関の山だ。私はその折々の娘の

目を忘れることができない。素直に相植をうちながらも、その目は、「私の悩みはそんなものではない」と語っている。誇り高き青年期なのである。

この時期、彼女が書を読むことによつて得た慰めは大きく、書はどれほど彼女の師となり友となつたか。また、「僻地の保母になりたい」と思うことが、彼女の果しなく抽象的に脹らんでゆく悩みを引き止め、地に足をつけて歩んでゆく人生への現実的な努力へと変えていったのではないだろうか。

○おねしょと指しゃぶり

その頃、彼女のことを考えていると必ず心に浮かぶ幼児期の出来事があった。或る夜、私は娘にこの話をして聞かせ、「だから、きつと、二人とも疲れて、なんとかなるさと開き直ったとき、あなたはあなたの力で飛躍してくれると思うわ」と言った。

その(一)は夜尿のこと、と言つても夜尿症のことではない。夜の排尿習慣の自立のことである。昼間に関しては、教科書

通り一年八か月頃に、おむつを外すことのできた長女が、夜間については、なかなか思うようにいかなかった。二歳七か月頃、夜も、思い切っておむつを取ってしまった方がよいのかも知れないと、おむつを止めてみたことがある。その結果、夜間に一度ではなく、二度から三度の排尿があることが分った。一週間続けてみたが、母娘共々睡眠不足でふらふらになってしまったばかりで、何の成果も見られなかった。またおむつに逆戻り。私は毎日のように、なにかよい方法はないかと思案し、三歳ではまだ夜尿症ではないと慰め、大人になるまでにはなんとかなるでしょうなどと、無責任に自棄な言葉を口にしたりました。

三歳の誕生日も過ぎた或る夜、寝巻に着替えるのを手伝っている時、娘が、「○○ちゃんも○○ちゃんもおむつしないんだって、だから私もしない」と言いだした。夜中に何回も起きなくてはならないかも知れないが大丈夫かと聞くと、大丈夫だと答える。それではと、寝室は二階にあったので、夜中に階下のトイレまで降りるのは危いからと、廊下に便器を置き、おむつを止めた。その夜の不安と期待を忘れることはないだろう。

娘は、その夜以来、夜間も排尿には自分で目を覚まし、自

分で用を済ませ、その数も一日一回から、二日に一回となり、次第に夜間は起きなくてもよいようになっていった。

その(二)は指しゃぶりについて。長女は、いつの日からか、「ネンネ」と称する毛布を右手に持ち、左手の中指と薬指をしゃぶるのが眠くなったときの習慣となっていた。ライナー・スタイルである。このため、中指と薬指には「タコ」ができていた。旅行に出るときも毛布を忘れることはできなかった。だから、はじめWサイズであった毛布もいつの間にかベビー毛布サイズとなり、度々の洗濯に、色は、家中で「ピンクのネンネ」と言わなければピンクとは分らないほど色褪せていた。それでも娘にとっては、大切な大切な「ネンネ」であった。私は、「指を口に入れるのは止そうね」と、時々気弱に声をかけるばかりで、この「ネンネ」に代るものを用意することができなかった。

そうしているうちに、幼稚園の三年保育に入園する日を迎えることになった。三歳九か月の頃である。明日が入園式という日、娘は、「明日から幼稚園ね」と、朝から何度となく、歌うように、確かめるように、口にしていった。そして、突然「明日から幼稚園だから、ネンネを捨ててくる」と言いだし

た。団地のことで、近くに大きな焼却炉があった。娘は、そこに、自分で、大切な「ネンネ」を燃やしに行った。そんな事ができるのだろうか。それが成長なのだろうか。彼女は、大切なものを焼却することで何を得るのであるか。等々、私はしばらくは仕事も手につかず、子どもの持つ不思議な力に感動して坐り込んでしまった。

その夜は、さすがに、右手はまさぐる「ネンネ」を求め、左手も口の中に入れることは入れてみたりと、寝着くまでには相当の時間がかかったようだった。だが、その日から、もう夢中になって指をしゃぶることはなく、指の「タコ」もいつの間にか消えていった。

この二つのできごとを、私はことごとくに思い起す。子どもの成長には、ある日突然のように飛躍する時がある。そしてその日は、子ども自身が選ぶのではないだろうか。その日までには、ながい準備期間がある。この期間、ある時は苦しみ、ある時は惑う。この惑いに私はどれ程の助力ができるのだろうか。ただ一緒に悩むだけのことも知れないと思うときがある。

○鉛筆削り

もう一つ、心に残る「飛躍のとき」がある。

今でこそ、鉛筆を電気に削らせるから、最近の子どもは無器用なのだと、ナイフが見直されているが、長女が一年生に入学する頃は、ナイフは危険であるということで、ナイフを学校に持って行くことは禁止され、教室にも鉛筆削りが置いてあった。

母親が雑学で子どもに対してしていたならば、父親は哲学で対するのではないだろうかと思うことが度々ある。鉛筆削りもそうだった。父親は、鉛筆を削るといふのは、農夫が農具の手入れをするのと同じだ、勉強をする前に、心をこめて鉛筆を削る、その時に勉強に対する心の準備ができる、だから、鉛筆はナイフで削りなさいと言っているのである。勿論、一年生の子どもにその意を解することはできなかったにちがいない。だが長女が五年生になるまで、我が家に鉛筆削り器はなかった。

長女が五年生、十一歳の誕生日を迎える頃、誕生日のプレゼントに鉛筆削りを買って欲しいと注文した。そして、「バ

ペの言うことは分かるけれども、私の買う鉛筆はパパの鉛筆のように削り易い鉛筆ではない。一本の鉛筆を削るのに何回も芯が折れるから、時間がかかるし、机や手が汚れる。鉛筆もすぐに短かくなってしまう。だから、かえっていらいらして、パパの言うようには勉強に対する心がまえができないと思う。五年生になって鉛筆をよく使うから、毎日何本も削らなくてはならない。だから鉛筆削りを買って欲しい」というのである。

これが、長女が父親に対して真正面に立ち、自分の意見を堂々と表現した最初のできごとであった。その翌日、私達は電気鉛筆削りを買に行った。

○読書について

再び読書のことに戻る。今でこそ受験勉強をしながらも、文学書を手から離すことのできない長女も、幼児期から「本の好きな子」ではなかった。

三年保育に入園する頃、自分の名前だけは読み書きできるようになっていた長女も、文字に対して、さほどの関心があるわけではなかった。それが、入園して間もなく、字を教え

て欲しいと言いだした。なんでも、目次のシールを貼る園児ノートを、字の読める子どもは、配らせてもらえるのだと言う。だから、字を覚えたいと言うのである。こうして、長女の文字との付き合いが始まった。だが、文字に関心を持ったことからではなく、園児ノートを配りたいという願いから始まっただけに順調にはいかなかった。文字の多さに腹を立て、似通った文字のあるのに苛立って、もういい、と投げ出してしまったときもある。次女が、昼寝のとき読んで聞かせる絵本を、眠くないままにめぐりながら、これは？　これは？　と、何度も何度も問いかけ、一字一字読み進み、これを一週間程続けるうちに全部覚えてしまったのと思えば比べると随分時間がかかった。

これが原因になってか、長女の文字嫌いは相当長く続いた。小学校四年生の頃まで、童話は勿論のこと、絵本やマンガでさえも、ほとんど手にしようとはしなかった。だが、彼女には、生来のコトバに対する感覚の鋭さと、話の内容を把握する優れた能力が感じられた。

次女と二人テレビを観ていて、「あの人どうしたの？」とか「○○ってなに」と、次女はよく長女に質問する。長女は画面に見入りながら、間髪を入れずという感じで答えるのだ

が、それが実には、一度ならず驚かされた。

長女の真の本との出会いは『赤毛のアン』だと思ふ。あれ程夢中になり、一気に読んでしまった本は、それまでにはなかった。小学四年生の頃だった。それからの彼女の読書は堰を切った水のような勢いであった。少年少女小説を読み、『風と共に去りぬ』を読み、日本文学へと移っていった。『橋のない川』や、遠藤周作の『沈黙』は彼女の愛読書となり、高校生になってからは、本棚に美しい絵本も並ぶようになった。マンガもある。『ハイカラさんが通る』は、長女が高校を受験する頃、お小遣いで買い揃えたもので、面白いから読んでごらんと私にも進めてくれた。以来、長女と次女、そして私と、三人の愛読書になっている。

本を読むことにも一人一人のリズムがある。

次女は幼児の頃から三年生位までは、絵本や童話をよく読んでいた。だが以後中学三年頃まで、ほとんど読まなくなってしまった。木のぼり、鉄棒、自転車、野球、バスケット、日の暮れるのも忘れて、走り、跳び、動くことに夢中だった。

読書の大切さが云々される。母親が読書をするので、子

どもが本を読むようになるのだろうか。母親が子どもに本を読むように仕向けることができるのだろうか。本を読んで欲しいと願うことはできる。なによりも必要なのは、感動を与える一冊の本ではないだろうか。そして、一冊の本は、ひとりひとり、別の本なのだから、その本との出会いを待つしかない、そんな気がする。その出会いを経験した長女は幸せだと思ふ。

☆ ☆ ☆

以上、とりとめもなく、長女の成長を思い起してみました。そして、思い悩むばかりで頼りにならない母親であることを、あらためて自覚しているところで。

これからも、大学受験、就職、恋愛、結婚、出産と、娘達が悩み、私も悩むことが続くことでしょう。しかし、長女に関して、自分の力で切り抜け、成長していくであろうと、そんな気がします。母親の直観です。

★海外文献紹介★

PLAY: The Child Strives Toward Self-Realization



NAEYC

ピッツバーグ大学の子どもを扱う研究機関 (The Arsenal Family and Children Center, Western Psychiatric Institute and Clinic, School of Medicine and Department and Clinic Care, School of Health Related Professions) と NAEYC によって主催された「あそび」をテーマとした会議の会議録である。序論を含めて六つの論文とあそびに関する文献紹介で構成されている。

序論で S・アーノウド (Sara Arnaut) は、「あそびの機能をピアジェの認知理論、社会心理学、精神分析学、精神力学のそれぞれの立場からと、さらに新しい見方である人間学の分野から言われること即ち「多くの種において若いものは老いたものより大いあそびに熱心である。また神経組織が複雑であればあるほどその種はあそびずきである」というナチュラリストの見解を紹介している。これらのことからあそびと種の生存との関係について「神経組織の複雑性とあそびの多様性には関連があるか」、「あそびの価値観は文化や伝統によりゆがめられてきているか」、「あそびは快楽であり、本来の仕事がなされたあとの骨休め的なものか」の問題提起があり、これらへの取り組みとして Arsenal Family and Children Center (以下 AFCC) における子どもの観察研究が進められてきた。

子どもの行動観察はビデオテープに収録され会議における討論

場面で常時使用された。この序論の中では特に正常児のあそびの特徴が一歳、よちよち歩きの間、三歳児、四歳児、五歳児、六歳児のげきあそびの項目ごとに、ごっこあそびの展開に焦点をあてて紹介されている。

N・S・ブラウンとN・E・カーリーによる、子どもたちは集団あそびを通して共通のストレスをどのように処理していくか、の論文では、AFCGの子どもたちが偶然彼らのいるすぐそばで、ひとりの見知らぬ男が、致命的な負傷を負うという事故（地上から二〇フィート上でクレインライクマシンから下のコンクリートに落ちた。彼はヘルメットをかぶっていないかったのだ）とその時のおとなの救急処置を目撃した、子どもたちのこの体験はそのあとあそびへどのように表現されていたかを報告している。

五歳児（幼稚園児）の反応特徴は、彼らは次の月からゲームやごっこ遊びに反映していたが、男児は女兒より困惑状態に陥っていた。彼らはあそびにはヘルメットが必要であり作業員や救急車・建設設備に大へん敏感であった。事故のあとブロックからとんだりおちたり、のぼったりという最初のあそびはその後ずっと男児達にその年度を通してあそびの脈らくの中で採用された。男

児が女兒とあそぶことができた時、彼らは身体危害の不安をのりこえ彼ら自身のあそびを展開することができるようにみえた。女兒たちは病院ごっこにおける回復させるというテーマを通じて最初から事故に反応していた。個々の女兒は死と身体危害の不安をグループあそびにおいてより、彼女達自身の努力を通して表現した。

四歳児のあそびは、攻撃と破壊の象徴的要素（ブロックを高く積みあげその上に動物のおもちゃをおき今にもその動物がブロックからおちてきそうな積木あそび、木からおちて死んだ男や射たれた猫の絵の描写etc）を伴って断片的にあらわれ、これが劇ごっことなってあらわれるのは事故のあと一か月を過ぎてからであった。彼らはお互いに無情なほどに攻撃的な衝動でふるまい、このことを通して徐々に危険な環境を知覚した。四歳児は、その環境刺激を内的にとり入れ同化する必要がある、外的に作用し始めるのに月日を要するようみえる。外傷に対する不安を解消できない子どもはまだ未成熟であり、他の四歳児との組織化が進んでいない子どもであった。この特徴は部分的には現実に基づいた事故の認識と空想の大部分を混同しており犠牲者と自分を同一視していた、と分析する。

三歳児や成熟のおそい四歳児には現実と空想がまだはっきりと

区別できないようだ。三歳児のカールは、事故について話すとき、指しゃぶりをして落ちる動作をする、三歳児の典型的運動反応をみせた。彼らの不安は風とか光とか他の刺激に汎化され、より長い間反映されている傾向があった。彼が四歳半になった時、事故をテーマにしたお医者さんごっこのおそびの中で何度も指しゃぶりをしながら死を演じた。三歳児は長い時間の経過のうちに内部的同化を伴って外傷からの不安を成就したと思える。

子どもたちがストレスにぶつかった時、先生はそれが子どもたちにとって後々徐々に解消されていかなばならない衝撃であることを認めなければならない。そのために先生は、その経験を話すとか、遊びとしてとり入れることが治療的解決や高い人格構造をも達成することになろうと結論づけている。

サラ・スミランスキー (Sara Smilansky) は子どものおそびを發展させるために、おとなの介入が有効か否かを問題にする。著者はイスラエルの子どもや、シカゴ・オハイオの文化的に不利な条件にある子どもたちは、ソシオドラマティックプレイをしないことを観察した。そして自然な成長とプレスタイルやキンダーガルトンの非指示的で豊かな環境だけではこれらの子どもに必要な

援助は十分ではない。教師や親によるある程度の積極的な介入なしではソシオドラマティックプレイを展開させることはできないであろうとする。

カール・ロジャーズは、教育の目標は教えることではなく学習の援助である。この援助の条件として最も重要なものは援助者と学習者の相互的な人間関係の質であり援助者の公明な真実に生きる態度を強調し、この真実が賞や世話、真、尊敬を学習者に対して含んでいる時、学習の傾向が高まるとする。著者らはロジャーズのこの援助者の定義に基づいて非指示的な援助をするおとなは子どもたちにソシオドラマティックプレイを促進させることができると仮定し、ソシオドラマティックプレイの発達の価値の大きなことを強調し、その定義・介入の仕方とその実践例がのべられている。

ソシオドラマティックプレイには現実の模倣の要素とこの正確な模倣の限界の補償作用にも通ずる想像的要素がある。このソシオドラマティックプレイが展開されるとみなすことのできる必要条件として次の六つがあげられている。

- ① 模倣役割おそびになっている。
- ② ものに関するみせかけの行為になっている。
- ③ 行為と状況に関するみせかけ行為になっている。

④ 少なくとも十分間は一つのあそびが継続している。

⑤ 少なくとも二人以上の相互交渉がある。

⑥ 遊びに関連した何らかの言語的相互作用がある。

ソシオドラマティックプレイの発達の価値

① 創造性を高める

② 知的増大（新しい知識の獲得・抽象能力・概念化の拡大）

③ 社会的技能の習熟

○ ソシオドラマティックプレイを促進させるためのおとなの介入について

親の役割は決定的に重要である。間接的には、健全な同一視のために正常な情緒関係が用意され、人間行動と社会関係の理解のために概念的・情緒的・言語的手段がとられ具体的な存在から、言語的に描写される仮定の存在を生ぜしめる能力を発達させることである。直接的には一緒にあそぶための友達・玩具・場所・時間を用意し、あそびの中で様々な行動パターンの模倣を教えたり、強化し、その活動や言語表現において……のふりをするやり方を教えることである。

さらにソシオドラマティックプレイを促進するための一研究が紹介されている。ここで教師の働きかけと子どもの反応をあげ

ソシオドラマティックプレイへと発展していく過程が具体的に示されている。この結果をまとめると、外側からの介入の仕方として、

① 質問による（あなたのベビーは元気ですか？）

② 暗示、誘い（例 ベビーを診療所へ連れて行きましょう）

③ 行動の明確化（例 私のベビーが病気の時も同じことをしましたよ）

④ あそび仲間間の接触の確立（例 他の子へ「どうぞ彼女を助けてやって下さい」と持ちかける）

⑤ 直接的指示（例 ベビーはどこが痛いのか看護婦に言いなさい）

があげられている。

この他に教師自身が役割をとって演ずることによる介入の仕方がある。介入のすべては……のふりをする役割ごっこの観点からであり、教師はその子どもにはなく、役割をとっている人に働きかけているのだ。それはテーマの設定、役割取得、役割に促した行為を暗示することであり、その程度は、ごっこ遊びの三つの段階

① 劇ごっこはしていない

② 劇ごっこをしている

③ ソシオドラマティックプレイをしている

の、どの状況に在るかに依存し、さらに、ソシオドラマティック
プレイの六つの必要条件を満足させている程度に依存するとして
いる。

N・E・カーリーによる「あそびに関する最近の基本的論点の
考究」においては、この会議にそなえてなされたあそびに関する
文献調査から討論のために八つの論点が導かれた。そのおもな内
容は、

- ・あそびの精神発達の役割（例えば個性化や攻撃衝動のように子
どもたちが行くわずかな発達のストレスの解消との関係）
 - ・あそびの発達の順序性と後の発達への影響について
 - ・ソシオドラマティックプレイの認知発達への貢献とそれのできな
い子どもたちへの配慮の効果について
 - ・人生の目標とあそびの関係について
- である。これらの観点からビデオテープによる子どもの行動観察
を併用して討論は進められ、あそびの高い意義とソシオドラマテ
ィックプレイの価値の確認と介助者としての教師の役割が確認さ
れ、さらに人生の目標としてのあそびの位置づけが検討された。
また、今後の研究方向としてB・S・スミスの発表から子ども

をもっとよく知るための観察視点を取りあげている。そのおもな
ものは、

- ①子どもは誰の模倣をするか。その結果はどうなるか
- ②子どもが模倣するのは相手のどんな行動の部分か
- ③子どもが彼の世界を築くときその築かれた世界の中に取り入
れるものにはどんなものがあるか
- ④微細な知識 (microknowing) の形態に属するものは何か。
- ⑤構成 (structure) とは何か。そこからくるあそびの変化と多
様性について
- ⑥新奇性 (novelty) とは何か
- ⑦モデリングと、げきごころと性差の関係について

をあげ、彼女はこの発表論文の中であそびを探索・試み・模倣・
構成とタイプ分けして、あそびの過程を探索—あそび (play)—あ
そびすぎな (playfulness) としてその具体例をあげている。

女の子が彼女の母親のいつものモデリングをしているのを適応
(adaptation) と呼ぶが、おもちゃを使ってそれをするとき、それ
は最初の模倣とは異なる模倣であり、この二番目の模倣をあそび
(play) と呼ぶ。しかしその女の子がそのおもちゃの皿を頭にのせ
ラララ…とうたいながらダンスをするとき、これをあそびすぎな
(playfulness) と呼ぶ。

このあそび、ずき、が、なす最も重要なことは人生を価値ある生活にすることだ。あなたがあなた自身の経験に伴なうことをあそびずきの方法するとき、あなたは生きていることを楽しむ。と人生におけるあそびの価値を位置づけている。

最後にこの会議の要約としてD・B・ガードナー(D. Bruce Gardner)は子どもの行動の機能的特質に関連させて「子どもを本当に理解し発達へ貢献しようとするなら、子どもの行為をPLAYかNON-PLAYかとか、WORKかNONWORKか等と分類する必要はないのだ……子どもはまわりの多数の刺激を積極的に受けとめ、ここでフィルターシステムを働かせ外界からの諸物を取り入れるものと取り入れないものを選択に活発に関与する。さらに彼がその世界に取り入れるものは何でもそれまでの貯えられている物質に統合される。この統合に基づいて彼に役立つようにさまざまに変化させて刺激に反応することが出来る最もすばらしい行為者である。この行為はオープンシステムのカリキュラムの中で發揮させるのだ。DR・J・ガラナーは、もし世の中のみんなが親指のない三本指で生まれてくると何が起こるでしょうかという質問をする。ある子どもはそこに不具な子どもをみ

る。他の子どもは六を基調とした世界をそしてドアノブの代りにスライドノブといった新しい世界を想像したのだ。

七二頁にわたる会議録を読み終えて、ここに掲載された発表論文が、ピアジェの認知理論や、フロイドの精神分析理論等のこれまでの研究に基礎をおきながら、子どものあそびにおける過程が、発表者の実践と理論的研究から、○歳から各年齢段階において特徴的に把握されている。特にソシオドラマティックプレイが、子どもたちの生活をより豊かにすることへ果たす役割が大きいことも強調されている。そして、あそびが、生きることへの喜びに貢献する大きな力となっていることをくりかえし強調している。



(札幌大谷短期大学 大西道子)

幼い子どもにせがまれて、何度もうくり返すおはなしには、子どもの成長にとつて大切な要素がふくまれていることを、後になって発見することがある。先日亡くなった上沢謙二氏の『新幼児ばなし三百六十五日』（恒星社厚生閣）の中の「赤い赤ちゃん牛」もそのひとつである。早おきのにわとりさんは、けさも一ばん早くおきて、みんなを起しました。「お日さま出たよ。天気はよいよ。モーさんおめでとう、赤い赤ちゃん生まれたよ」そうすると猫がいう。「お母さんに似て赤いね、いい赤ちゃんだ。」犬がいう「やわらかくて赤いね。」馬がいう「しっかりして赤いね、いい赤ちゃんだ。」ここまで話すと、寢床の中で聞いていた子どもたちは一斉にいう。「あたしの生れたときはどうだった？」「あなたが生れたときは、やわらかい髪の毛が薄くて上品だった」「あたしはどうだった？」「あなたは真黒な髪の毛がふさふさしていた」「それで

お父さん何ていった？」「元気で立派だになって」「ワハハハハ」自分の赤ちゃんのおきのはなしは、何度くり返してもあきない。中学生になっても、高校生になっても、同じ会話をくり返す。覚えてはいない自らの出発点における、親との信頼をたしかめているかのようである。赤ちゃんのはなしはもつとつづく。毎日、朝出かけて、夕方には帰ってくるお母さん牛が、ある日、夜になっても帰らない。猫も、犬も、馬も、皆が心配して慰める。泣きながら一晩を過すが、翌朝になるとお母さんが戻ってくる。そうして赤い舌を出して、べろりべろりと赤ちゃん牛をなめる。お母さん牛が帰ってこないところでは、ふとんの中にもぐりこんで聞いていた子どもも、最後のところにくると、顔を出してにっこり笑う。揺がない信頼をもう一度確かめているかのようである。幼い子どもにおはなしをするのは本当に楽しい。

(津守)

幼児の教育 第七十七卷第十一号

十一月号 © 定価二二〇円

昭和五十三年十月二十五日 印刷
昭和五十三年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館 にお願いたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

Printed in Japan

家族そろって“どうわ”の世界へ…

キンダーブックのフレーベル館がおくる家庭紙芝居の決定版!!

幼児かみしばい

やさしいライオン



文・絵/やなせ・たかし

みなしごライオンのプルブルは、やさしい犬のムクムクとしあわせに暮らしていました。突然、別れがやってきます。プルブルとムクムクの哀しくも感動的な愛のストーリーです。

ケースのおもての絵でジグソーパズルができます。ジグソーパズルは遊びのなかで、お子さまの思考力を自然に高めます。

好評発売中!!

しらゆきひめ

文/神田幸子 絵/手塚プロダクション

ブレーメンのおんがきたい

文/三越左千夫 絵/おぼ・まこと

美しいケースが舞台として使えます!!
ジグソーパズルで遊びましょう!!

新発売

ジャックとまめのき



文/舟崎靖子
絵/エム・ナマエ

貧しい少年ジャックが、太い豆の木を登りつめると、そこは人食い鬼の住む、恐ろしい城でした。勇気あるジャックと人食い鬼とで織りなす冒険物語です。イギリス民話が原典です。

12のつき



文/稗田幸子
絵/司 修

マルーシカは、やさしく、美しい女の子。でも、おかあさんとねえさんのホレナにいじめられてばかり。12のつきのせいたちに助けられて、やがて、幸福になるという、チェコのお話です。

舞台兼用美麗ケース入り
B5変型判 本文12枚
定価(各) 500円

おおかみと七匹のこやぎ

文/筒井敬介 絵/福田庄助

こぶとり

文/横 晴志 絵/梅田俊作

ヘンゼルとグレーテル

文/伊藤海彦 絵/鈴木琢磨

おむすびころりん

文/横 晴志 絵/若菜 圭

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 ☎(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

キングダム かるた

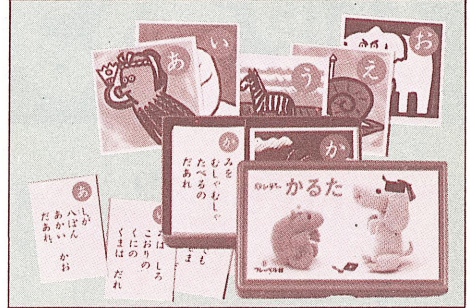
楽しく遊びながらことばに対する興味や関心が高まります。ご家族で楽しくお遊びください。

●世界の童話

●いきものなぞなぞ



日本語をはじめ、世界中の童話を集めて構成しています。



いきものなぞなぞがテーマです。

キングダム **かるたA** ★プラスチックケース入り 250円

文・川崎 洋/絵・岡本信治郎

キングダム **かるたB** ★プラスチックケース入り 250円

文・鈴木悦夫/絵・山下勇三

●楽しく遊びながら、ことばや数に強くなる! ●

フレーベル館の 幼児 トランプ

絵・尾崎真吾

動物と果物のマークをくみあわせた、楽しい幼児用トランプです。ババ抜き、神経衰弱、7ならべ等のトランプ遊びのほか、集合遊び、数遊び等の教材としても使えます。



★87×57ミリ (54枚)
★プラスチックケース入り

250円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課☎(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館